

太平記 大塔宮曦鎧

近松門左衛門添削

竹田出雲掾

作者 松田和吉

舞に錐を立つるの地なけれども天下を保ち。再またに十戸の聚あはれなけれども諸侯に王たり。上三光の明を覆はず。下百姓の心を破らざるは。王者の衝心の法。國に傳へて九十五代。後醍醐の帝のしろしめす。御代ごだいの治亂ちらんぞ。參差さんさたる。宮數みやかず多おほまします内。第三の御子大塔の宮二品尊雲法親王。山の座主に補せられ。王城の鬼門を守り三千の衆徒を管領し。兼ねては天下の政にも參はり議り給ひしかば。君の招きに駕を待たず。衆徒坊官も連れられず。伺候の武士村上彦四郎。義光一人扈從にて。參内あるこ

そいみじけれ。御階の下に跪き。召しに依つて尊雲參内と奏聞あれば。内より御簾みかさ卷き上げさせ。龍眼常ならず忿怒の御髭。逆鱗の御背。袞龍の御衣まくり手に寶劍携へ。山の座主か珍らしや。御身と心を合せ計るべき旨ありて。召し寄せつると宜ふ御氣息炎と燃え。右少辨俊基中納言資朝卿。御座の左右に近侍し。火を吐く眼は赤酸漿只事ならぬ相好。暫し呆れおはせしが。大塔の宮大音上げ。君の御有様は必定。天魔の邪法を行はせ給ふ番さよ。儒佛の二法を補佐とし天神地祇の教へを本とし。四

海万民を統御し給ふ御身の上。何を足らずとしてか魔界に陥らんとの敷慮淺まし。資朝俊基などか謀めを獻らず。魔道に誘引し奉り。大日本を魔國にせんとは神敵佛敵。はやく散唐を改めらるべしと。皇怒りの龍顏に御涙。朕みだりに魔術を貴むにあらず。今鎌倉の權威天下を呑み。朝廷日々に衰へ。禁中の事皆六波羅の下知に任す。口惜しさよ無念さよ。此度位を朕が寵愛今年八歳の乙の宮に。譲らんと思ひし所。六波羅より是を押へ。兎角鎌倉の下知に任すべしと讓位延引す。此心を案するに彼等に緣ある先帝の末の宮逆仁親王を。位に即けんとの所存鏡にかけて顯れたり。魔王に與し鎌倉六波羅を亡し。今の恨みを晴らさん爲の行ひぞや。魔道は此世の地獄なれば。未來の苦しみ思ひやると焰

に交る御涙。スエテ夕日の前の玉霰。御痛はしくも、フシ恐し。大塔の宮伸び上り。御ア、御心狭き勅誥かな。六波羅鎌倉を亡さんに天魔の手を借る迄も候はず。我諸佛方便の教をまなび。無禮講と名付け在京の武士を集め。酒と色を以て打解け馴染み相語らば。近國の侍に誰か勅命を背く者候べき。其時菩薩の折伏門に入り解脫檀相の衣を脱いで。堅甲利兵の甲冑を帶し遺俗の形となり。一味の大軍どつと押寄せ。一時に踏破り

大将駿河守が首取つて。獄門に切りかけ宸機を安め奉らんは。尊雲が方寸に候と。フシ詞涼しく奏聞あれば。尊色怒りの龍顏引替へて。忍辱柔和の御粧。掌を返す如くにて。フシ兩脚。兩座を下りける。尊色かゝる所へ武家の御奏坊門の清忠罷り出で。鎌倉の御教書到来。則ち今日御位定め。常盤駿河守逆仁親王を供奉し。參

内致し候と奏聞あれば。尊色すは兩宮の内御運定めと禁中ざゝめき。八歳の若宮も御褥に着き給へば。百寮百官。ナリ左右に。別れ着座ある。駿河守範貞卿相雲客に禮儀もなく。さながら攝政關白の内參りの如くに。鎌倉の文箱を御前の案に据ゑさせ。御即位の事此御教書の文言次第。何れに御位定まるとも兩方異論あるべからず。御ア、御文箱開かるべしと邊を見れども威に恐れ。披見と言ふ者もなかりしに。大塔の宮是を讀むに何事かと。封振切つて箱投げやりさつと開いて。ム、さこそあらんと思ひつ

れ。外の文章は讀むに及ばず。先帝の王子逆仁親王を御位に即け申せとの事なるぞと。尊色仰せもあへぬに駿河守一人喜び。帝は瞋恚の御涙。伺候の諸卿詞なく。眉を撃むるばかりなり。大塔の宮の御供物に堪へぬ村上彦四郎義光。憚らずつと出で。ハ、ア事新しき御即位。逆仁親王とは。元は先帝の末の宮なれども。一度六波羅殿の養子となり。相模太郎時行と名乗り。角前髪のものこ髷。糺河原の相撲芝居の棧敷で。冷麥を搦込んだは諸人の見る所。それを俄に月代のばし逆仁親王。神武以來當今九十五代迄。一度武家の養子やう。五位の諸大夫に。成るか成らずの身を以つて。十善の位に即きたる例終に聞かず。我等が主人大塔の宮の上に即く事先づ慮外。つと下れ相模太郎但しお手を引き申さうかと。立たんすれば大塔の宮。ヤア宮中なるぞ荒氣をするな鎮まれ。と。制し給へば進みもやらず。駿河守範貞エ、我が威勢を恐れぬ憎い奴。極てくれんと太刀に手をかけ睨め付ければ。彦四郎も太刀捻つて何ぞ云うたら返答せんと。云はぬばかりの眼ざし。彼奴が面付唯者ならず

毛を吹いて斑を求めんよりと。柄にかけたる手を打拂ひ。えへんくくと空嘯き。フシ見顔してぞ居たりける。地時に春日の社人藤原の仲業。あわたゞしく参内し。詞今朝神前神木の松の藤。斯くの如き花咲き候故。不思議に存じ時を移さず。寂覽に供へ候と紫ならぬ紅の。勝のしなへ三尺ばかりなる。今を盛りの一房を御前に捧ぐれば。人々はと手を打ちて奇異の。思ひをなし給ふ。駿河守笑壺に入り。ハ、ア神慮は疑はれず。何と方々見られたるか。春日山に時ならぬ白藤咲きし例はあれど。紅の藤咲きしとは古今例を聞かず。總じて白きは源赤きは平家。逆仁親王は我々平家御取立て申す所。折しも赤き藤の咲く事。此親王を万葉の御位に即け申せとの神勅。

御國譲りあるべしと申しも敢へぬに逆仁親王。若宮の櫛近くつかく」と寄つて。詞今日よりは鷹は東宮。無品無官の幼稚の身として。鷹が上座は緩意至極と。幼き御手を取つて引下し。ありし御座にどつかと坐すれば駿河守はしたり顔。若宮は面なげに御涙ぐませ給ひければ。大塔の宮を始めとし堂上堂下村上彦四郎。寂慮を憚り詞は控へ睨み詰めたるげかりにて。皆々拳を握りける。天皇日の御座の御剣を取つて高御座につつ立ち給ひ。宮中も響く御聲にて。我國の三つの寶は智仁勇の三徳にて。穢へ譲り受けても此三つの理に背けば。却つて神罰を蒙る。就中此寶劍の成徳。帝道に背き私ある時は。寶劍鞘袋を離れ給はねども。難病災難となつて玉體を惱し。忽ち國王の命を斷つ事干將莫邪よりも鋭し。地見よく今云ふ詞に驗な

くば。天照大神の訖宣は皆偽りなるべきぞと。日月の如き龍眼にて四方をきつと既廻し。御籠さつと下りければ。横紙裂きの駿河守範貞も。打つが如く切るが如き勅説に氣を奪はれ。東宮の御所は六波羅故諸卿の面々六波羅へ出仕あれと。逆仁親王誘ひ詞もなく退出す。一言事を破り。一人定む國津風のべふす。民こそ三三(豊)かなれ。大塔の宮の花赤松律師則祐。春日より捧げし赤藤の花にて。逆仁親王御位に極まりしは。駿河守と社人が中に物こそあれ。春日山に立ち越え化の根元見顯はさんと。宇治を流れの小倉堤淀繩手は川風に。柳の髪を亂せども。其氣遣ひない坊主頭。振廻す樗丸太に鐵の杖仕杖。息杖入らぬ足の乗物。踏出す一足五尺六尺かんはんも。木津川にこそ着きにけれ。見れば六波羅の檢斷高橋九郎。彼奴南都

にあると聞きしが。今歸るか逢うては喧まし。陰せん物と引返せば。駒野の方より逆仁親王。馬上ゆゝしく隨身白丁。前後を圍み乗りかけたり。是も逢うては猶喧まし。ハテ何とせん木蔭はなし家はなし。いづくに隠れんそれよく。宮の御秘藏鐘馗の繪に。橋の下に踞んだ鬼思ひ出した。これ究竟その眞似せんと傳ひ下り。渡して仕舞ふ柱。貫を踏まへて身を締め小さうなつて踞みゐる。心の鬼の赤松は。いかな鐘馗も手に合はじ。程なく兩方行逢ひの橋の上。高橋九郎頭を下げ。こは存じよらず。いづくへの行幸候と伺へば。されば今度の位争ひ。春日山に赤藤の咲きたる故。磨が利運となつて位に即く。これ明神の御加護。御禮のため社參するはと宜へば。高橋えせ笑ひ。赤藤の咲きたるを。明神の力と思召しての御社參ならば。明神も

さぞ迷惑。遠い春日より近い六波羅殿を日本國中の神佛とも思召せ。赤藤の咲きし事御存じなさうな。六波羅殿を御大切になさるゝ爲なれば。ちよと申上げん。總じて冬の日に藤の花を咲かす事。其木の根の土二三尺避け。廻りを掘りごもく土と云ふ物と入れ替へ。折々其上にて柴を焚き。毎日酒を根にかくれば時分に變らず花を咲かす。又赤う咲かせ様は。藤の花房一二寸伸びたる時。器物に紅を溶き入れ。其花房を浸けて置けば。伸びるに連れて花の色。眞赤に咲く事大秘傳。今度春日山に咲きし赤藤も。六波羅殿社人に教へ給ひ其仕掛にて咲きたる藤。天下の萬民肝潰せば。物説と云ふは六波羅殿一人。あなかしこ人に洩らし給ふなど。語れば親王是はとばかり。聞いて悦ぶ橋の下。大事の底を打明ける扱もいかい大だはけ。猶々盡くせ

と聞き居たる。高橋は南都より。何故只今立歸る。さん候此頃大塔の宮。無禮講といふ事を初め。足次郎重成多治見赤松村上など。日毎に寄合ひ酒宴亂舞と。六波羅殿聞し召しいかさま仔細ぞあるらん。某に立越え無禮講に入交つて。事を窺へとの御書に依つて罷り歸る。君もやがて還幸あれはや御暇と聞く赤松。憎さも憎しよい氣味して腹愈んと。橋桁に兩手を突張り。腰からうんと持ち上ぐれば。めりくぐつと柱を離れ橋板ぐるめ馬人も。宙に浮橋虹の橋。なうく悲しやこりや何事と。騒ぐも川へ落ちんかと恐れわなく橋の上。飛ばんとするを逃がしも立てず橋板どうと投げ付ければ。残りず水に投げ込まれ。瀬も知らぬ早川に押し流されては泳ぎ上り。浮きぬ沈みぬ濁りたり。赤松陸に狐上り。扇を開き大音上げ。ア、く花を

流すは吉野川。紅葉を流すッ立田川。出家を流す衣川比丘尼を流すは天の川。若衆流す尻無川おのれ等流すは赤松川。氣味よし〜一首の狂歌よつく聞け。木津川の水いかばかり早ければ。高橋落ちて流れ遊仁と笑うて。御所へ〜 歸りけり。酒は詩を釣り。歌を釣り。招かぬ人も。栗栖野小野。萬里小路中納言藤房卿の遊亭。無禮館と額を打ち。貴賤を分かぬ酒宴の會合。公家は素頭茶筌髮武士は丸腰法師は白衣。歌舞遊君に酌とらせ琴三味線の空遊び。實は六波羅討

亡す。計略他事はなかりけり。是はや暮渡る遠寺の鐘。訪なふ衣の空炷もそれとけるけき御粧ひ。八歳の宮の御母后民部卿三位のお局。御所を離れて栗栖野の館に告ぐる女中の聲。中納言藤房卿出迎ひ。見苦しき山莊不思議の御入り。君にもかなく御存じの通り。武家朝廷を傲び。我儘なる御位定め敷慮安からず。臣等が遺恨止むことなく候へども。當時六波羅の勢ひ容易くは亡されず。味方に心を通はす武士ども少々は候へども。大切なる御企て左右なくは明かされず。一つは武家の聞えを憚り。無禮講と名付けあだ口雜談に事寄せ。在京の武士の底意を計り候へば。およそ徒黨の人数も調ひ計略大半成就せり。今宵は某當屋にて。二心なき客外達の響應。今宵諸方の手筈を定め六波羅を討亡し。御愛しみ深き若宮位に立て。公家一統の世となさん。御心安かれと頼もしく申さるれば。さればとよ。大塔の宮を始め奉り各の心遣ひ。天皇様にも御喜び。それにつき自らわさく〜來りし事。かの右近府の侍所。土岐藏人頼員此會合に洩れしとや。彼には妾が恩もあり何卒一味させよとの。叡慮に任せ道より使を

立てぬれば。頼員やがて尋ね來ん。待つ間も憂しや奥の間の。人々の氏名乗連判状には聞きたれども。どれがどれやら知らぬ顔。教へ給へと宣へば。藤房卿案内して。手荒き武士の無禮の遊び。お笑ひあるなと次の襖を明けかけて。あれまれ御覽せ上段に形崩すましますこそ。名指すに及ばず此連中の御大將。大塔の宮護良親王。銀燭臺に身を背け夜食べら〜食ふ人は。大原の住職殿の法印良忠殿。こなたに立てる。明障子。白拍子と連三味線は馴染み多治見の四郎二郎國長。酌する禿を嫌がらす。無禮も無禮濡れ線先。立ちほだかりしは右少辨俊基と。聞けは局も可笑しさの。袖打覆はせ給ひける。白髪交りがまく骨牌。かは川越播磨守。六々八の引張り牌。先づ六波羅の頭をちよつる。次ぎの骨牌は八九三。是も目出度し鎌倉牌。根こきに

ナメスしやんと掻き込みし親は。二三四フシのぼり九寸。緞織の判官代。冴相摸の手合ひの力癒。赤松律師と知しめせ。四つ手に組みし瘦男下り。各下りとよついに袂ひ下帯は。日野の中納言資朝。大納言の大盃押へて師賢。手元の相は平賀の三郎。シ酒は一座の。出来不出來。村上義光下戸やらん。菓子盆抱へ飛び退きて。玄惠の講釋きくりんこんへい洞院の左衛門實世。足助の二郎重成が。話ひざゝめく舞扇。其外南都北嶺の衆徒。つどく名乗るに及ばずと語るも。見るせ目覺し。三位の君興に乗じ。聞きしに勝る殿原達。頼みある中の酒宴の興。差も共にと入らんとし給ふ御袖控へ。計略とは申しながら。無行儀のあの中へ三位様と聞くらば。袴よ烏帽子よと興覺し御出で無用と。云はせも敢へずこれ藤房卿。無禮講を合點してお使がねの自ら。

それをぬかるものかいの是見給へと。襦袢ふはと脱ぎ給ふ下には賤の赤前垂。誰が教へけん縁先の手拭ちよつと。頼に假の飯炊風。なんと。三位の局ちやあるまいがえ。お清所の供御炊しぐ。おさんであんすと御戯れオチリ打連れへ奥に入り給ふ。召しに應じ土岐右近藏人頼員。上童に誘はれ直ぐに通る大書院。無禮館と打つたる額きつと見上げ。ム、是ぞ聞き及ぶ無禮の間。折目高なる袴肩衣。心さばけぬ侍と。若公家ばらに笑はれんもいぶかしと猶豫ふ後の。唐紙押明け三位の局。瓶子土器三方に顔隠し。夜中といひ御苦勞の御出で。お氣晴らしに酒一つと立ち頼員が膝元へ。三方押しやり悟られじと。差俯。向いておはします。色好みもの藏人尻目につけ。見れば前垂掛姿に似せぬ徒外れ。首筋元のくつきりさ彼奴一切ればよき肴。仕

掛けて見んとにじり寄り。これはく。取込みの中お心遣ひ千倍く。併し酒は無調法。下戸の證據はきさまの様な。頭肌が我等の好物。色どれ御面相拜せんと。しなだれ纏れ差現けば三位の君。はつと飛退く後の襖。當つてぐわつたり悔くり敗亡。勿體なやと疊に頭。アはつと跪まる。コレ無禮講へ呼ぶからは懼りも慮外もないわいの。其慫慂で思ひ出す。舅齋藤太郎左衛門は今に變らず堅い顔か。妻の早啖血の道も起らぬか。夫婦が伸の力若も嘸おとなしう成りつらん。御所で仕へし昔の所縁早啖が噂も聞きたし。外に頼む事もあるさりながら自らが。大切な望みなれば假初には咄されず。と宜ふ聲に頼員やうく人心地。に餘る妻子どものお噂。畏れながら我妻も明暮れ君の御事のみ。今更申すに及ば

ねども。早咲御所にありし時忍び契りし不義の科。御情けに命を繼ぎ。お指圖を以つて夫婦になし下されし御恩。身不肖の藏人めにお頼みとあるに違背はなし。

御心置き給ふなと裏なき武士の一言。ヲヲ好を忘れぬ嬉しい心底。頼まれうなり頼むなり先づ固めの盃して。其上で語らんと三方に向ひ給へば。藏人頼員お酌にと立寄る袂瓶子にかゝり。からりと轉けて打ちかへる南無三寶も。碎けてはつと物思ふ三位の君の氣の毒顔。頼員はさあらぬ體。此土器の六つに割れしは六波羅殿。六波羅は平氏。平は平氏これ御覽ぞ。瓶子ころりと轉けたれば御氣に懸かる事あらじと。聞き聞かぬ先より頼みの筋早く推せし藏人が心中。敵か味方を重り兼ね。どうか、フスカウかと心おくには鼓の音。萬歳出立の懸烏帽子村上彦四郎義光。二人が中へ走り出で萬歳に

事を寄せ。藏人が心を調へる鼓ぼん／＼打鳴らし。

つはもの萬歳

萬歳若に御萬歳と御代も榮えましまさず。是は興がる有様や。土岐立歸るなあした迄密々話。氣質を探り尋ねんと。思ふは目出度うさふらひける。昔の京は難波の京。中頃は奈良の京。今の京と申すは。萬邪であの御天子を憚らず。我儘働く平の京。京の仕置は關東任せ官方ひづめ公家衆倒し。百姓虐げ。町人いちり。民は又ぎつちり／＼。誠に無念にさふらひけると、フシ問ひかくる。藏人微笑み。ホ、無禮講の御作意。村上殿の萬歳聞き所。併し一人打つたり舞うたり無勢では事ゆくまじ。數ならねども頼員が心を顯はす。幸ひの才若よく喋されよ。よく聞かれよと袴のそば取り扇を

開き萬歳と。三有難かりける天皇の。敵慮も安くおはしますさつても無禮の初まりは。昔二品親王の太赤松イ村上ニ二人の郎等天臺山より召し連れ下らせ給ひて。後醍醐天皇たつてについて。初めて謀叛を企て給ふ。誠に山々敷くさふらひける其後に。六波羅の大將の首はころりと。飛ばせ給ひて治まる御世は大内の。紫宸殿の柱の數が四十八本に極りて。一本の柱が一味の人々二本の柱が二心なく。三本の柱は三位のお局。コリヤオ若。三位様のお頼み京の町の賣物づくし。六波羅へ賣つて行くが合點か。サイヲヲ合點ぢや。合點か。サイ合點ぢや。うんサイうんニウ、うん／＼。やしよめ／＼。京の町のやしよめ。賣つたる物は何々。味方かも栗喜ぶ昆布。蜜柑柑子橘。こそあれ六波羅を討たんとは辛い胡椒。大イヤ。甘い胡椒。辛い胡椒。太摘んで見

や辛い、か、イヤ甘いは。甘い、甘い、  
は。二人やしよめ。京の町のやしよめ。側の棚見たれば。目出鯛海鱈鱈赤貝ふか、術に嵌まるな蛤子、蛤嵌まるな二人はまぐり子。蛤子。コレ太夫殿。お望みの京の町。一番に賣つて通る才若は仕合せ者、イヤ此太夫も仕合せ者、仕合せ、仕合せ、二人四本の柱に。始終仕済し五本の柱に御運を開き。六本の柱は、六波羅、滅亡、七本の柱が。七轉、八倒、悔めど、詫びても、泣いても。女叶はず、二人八本の柱は。八歳の若宮に。御國譲りて九本の柱に九重治め。十本の柱は。十善のさつさ。位治まる國治まる千秋萬歳の。萬歳。樂と舞ひ納む。

忠誠。偽りあるに於いては梵天帝釋。四  
大天王日本六十餘州の神祇。冥罰を受くべき者なり。土岐右近の藏人頼員と書付け。差添への小刀小指劈きしつかと据ゑたる血判。ヲ、神妙候頼員殿。大塔の宮の御披見に供へん。お目見えは後刻後刻と村上。奥に入りける。六波羅の忍びの犬高橋九郎諸門。案内もなく中つと通り。ヤア土岐殿是にか。無禮講と聞き付け直ぐに參つた。是は、三位のお局。はれやれ、願うでもない仕合せと御側にどうぞ坐し。八歳の宮のお袋なれども。子持ち喫い氣微塵もない。ぼんじやりと甘さうな肉合。其艶々としたお顔に。主人六波羅殿およがるも道理。折々の参内。天皇尊敬と思はるゝははまり。君がお妾見たいばつかり。結構な惚れ手願徳の三位様。よいお返事を承り拙者も御褒美。是。申し。申し。賜見してござつては濟まぬ。否か。應か聞き切らねば聞かぬ男と。主の威をかりぞんざい過言。聞き兼ねて藏人コリヤ高橋。酒に酔うたか寢惚けたか。萬乗の君御秘藏の三位様。無官の身として慮外千萬退れ。退れ。と極付ければ。ヤアさいふ和主が寢とぼけ。あの額が目懸からぬか。無禮と看板打ちたる座敷。何の慮外無禮咎め。但し今宵は慇懃講か。ぐつとでも云うてお見やれと遣込め。兎角情のお返事三位殿。うちや、としなだる。エ、耳が穢る。喧ましい面倒など。突突入らんとし給ふ腰に縋り引き留むれば。エイ推参な厭らしい。引退けてたもなう藏人。是頼員あれ。放しをらぬと掴つ、叩いつし給ふ程引寄せ締付け動かせず。頼員立寄り拳を握り高橋が小鬘先。碎けて退けとくわしと打つ。ヤイ藏人。侍



の生面なぞくらはした、言分あらば刀でせよと反を打つて詰めかくる。ヤア殿と掛け。あの額が目にも懸からぬか。くらはしたが無禮講。ム、誤まつた。無禮講面白い。無禮序に三位殿。六波羅へ連れ行かんと引立て出づる襟元掴み。引きかづきどうと投げける。音は高橋投げられながら減らず口。是も無禮か誤まつた。

餘程痛い無禮講と。起上る腰骨蹴据え。斯う踏むも無禮講。序に無禮まだ無禮。無禮々々と五つ六つ踏付け。三位の君奥へくと目で送り。高橋が腰骨掴み引起し。無禮講の馳走こたへたか。長居せば頼員が帯せし細身作りの冷し物。ひいやりと所望かと睨め付くれば。踏まれても打たれても。堪忍するが無禮講。冷物所望になし。三位殿が所望々々と。頼員が際すつと摺抜け。駈込む奥の明り障子ヲンさつと開けば。コハ、赤松村

上平賀の三郎。籠手腹巻に身を固め中央の床几には。大塔の宮護良親王金龍の大口。赤地の錦の鍔直垂。緋緘の筋え立つばかりに金物繁き御着長龍頭の兜を召され御手に采配寛然と。堅甲利兵の御勢ひ囀の。フ輝く如くなり。高橋あんこり腰据らず。膝節がたたく立歸れば土岐大音上げ。推量に違はず。無禮講に事寄せ六波羅を亡すたくみ。ヤア高橋が家來ども。六波羅へ注進せよと呼ばはる聲。頼員透かさず氣息の根止めんと斬つてかゝれば心得たりと抜き合はせよ。請けつ。ほどいつ。切り結ぶ。大塔の宮悠々と瞬きもせず御覽あれば。左右の勇士土岐藏人が奉公始め。手見せの勝負と。片唾を呑んで守りゐる藏人は手練の若者。附け入り。九郎が脇腹くわらりと薙ぎ返す刀に首打落し。静々と

御前に向ひ。怨敵の族仕留めては候へども味方の計略いまだ全からず。高橋討たれし事六波羅へ聞えなば大望の妨げ。某是にて切腹し。當分の口論に取成し事を鎮め申すべし。お暇たべと押肌脱ぐをヤア無益くと制し給ひ。高橋が家來の外。敵に洩るゝ氣遣ひなし。平賀赤松義光等。よく計らへと宣へば。三人諸共廣間に立出で。高橋九郎殿の家來衆。用事あるぞお庭へ廻れ。參れくと呼ぶ聲に。是は旦那のお立ち。草履よ鎧よと若黨仲間ない。ない。命がないとも。しら洲の切戸。ばらくと立出づる跡へ廻つて。戸口をはたと袋の鼠。一定づゝ仕舞うてくれんと三人拔連れ袂み立ち。弓手馬手へ斬伏せ討捨てサア仕果せたあぶなげなし。御運強き我君の軍は勝利。無禮講も是限りと額を丁と切り落せば。日月打ちたる錦の御旗明け立つ。空

に黷職たり。此御旗を眞先立て。分捕高名手柄は仕勝ちと。どつと勇めば大塔の宮ア、音高しく。地天に口あり地に

耳あり隠密くシイ。シイ。四海波風治め給へる御雄徳。御頓智備り勇備り。仁義

備り徳備り。御運も備り威を備へ。敵の鐵城鐵壁碎く。時は今此。持國増長廣目多聞。揃ひに揃ひし四人の勇者君は。

梵天釋提桓因。修羅に打勝つ御勢ひ誠に。征夷將軍と仰がぬ。人もなかりけり

## 第二

地臣として不忠なるは子として不孝なるに同じと。田氏が母の確言誠なるをや。

兩六波羅の下司齋藤太郎左衛門の尉利行。決断日の外も休みなく六波羅の北

殿。常盤駿河守の館に相詰め退出は何時も暮れ過ぐる。拍子木合圖に門を締め出入の札も初夜限り。法度強きも役柄の

外の屋敷にかはりけり。地色相更くる夜の表門七つばかりに賤しげなき。育ち刀の差しこなし只ならぬ男兒の。手を引く女の帽子眞深に。氣息繼ぎ敢へず駈來り。

誰を頼みたいくとしきりに叩く。門番出格子に髷面つと差出し。何奴だ慮外至極な何所だと思ふ。京洛中の御支配

齋藤太郎左衛門様のお屋敷。願ひ事訴訟ならば定まりの日に参れ。殊に今夜は六

波羅殿へお詰めなされ殿はお留守。御門先退けく狼狽へて捧戴くなど。目玉

光らし引込む面付。ム、さいふは門番どもか。太郎左衛門様のお屋敷成程合

點。斯う云ふ女は即ち太郎左衛門様の娘。土岐右近の藏人頼員が女房早咲とい

ふ者。是は我子太郎左衛門様の爲には孫。そち達が爲にも主筋。父上のお目

にかゝる大事の急用。忍びにそつと逢ひましたいと通じてくれ。頼むくの詞の

内。北の方より家の提灯先走りの徒歩の者。お歸りと呼ばはる聲に門番飛び出で。貫の木屐ぐわつたりびつしり八文字に開く地に鼻。手燭捧けて小性近習。式

臺に折目高なる玄關前。月に閃く鎧印父齋藤太郎左衛門利行。お歸りかいと乗

物に取付けば。驚き是はく。娘か孫の力若かと飛び下るゝ親子の親しみ。家來

も呆れ門番もぶち叩いたらよいものかと。刺下げ頭逆さまに。土に摺付け平

伏せり。夜中に親子徒歩既供も連れず参りしは。密にお耳へ入れたい事。若

しも夫頼員殿は見えまいか。必ずく夫始めて此事沙汰なし。心せかれや

と聞く親は猶心ならず。は何も云ふな仔細は知らねど。立ちながらの沙汰ではあ

るまじ。家中の上下此事口外に出さば程度曲事。いざ先づ奥へと孫の手を引き入りければ。留守居供人それとも言はず互

の心に望月の。駒も殿に門々締め、フシ家中静まり更けにけり。●心を配る時も土岐右近の藏人頼員が、閨に妻子の行方なし。未練の女め天皇の御謀叛に興せし事。舅齋藤に内通の抜駆け。心を許し大事を女に打明けしは我が不覺。踏込んで仕儀により勇ぐるめに生けては置かじと。矢を射る如く一文字に駈付け。舅齋藤が館の高舞ホ、ウ高しとて五丈七丈はよもあらじと。腕を伸ばして一躍すれば。土手の垣に手はかゝつひらりと上り内を見やれば。利行が居間の小庭仕濟したりと松が枝を。取るより早く飛鳥の如くナリ、白洲にへそつと、フ折こそよけれ。●雨戸洩れくる女房が聲の聲扱こそ扱こそ。彼等が命は詞の安否二つの内と。腰刀捻ちくつろげ。雨戸に手を寄せ耳を付け、フ氣息差しもせず聞き居たる。●物越しに騒くも聞きは違へぬ女房が聲。我等

體が口に掛け申すも畏れ、フ多けれども。●鎌倉の惡逆いや増し。兩六波羅の無理非道の政道著り。天の憎しみ神の怒り。●鎌倉一家の滅亡三年は過ぎまじと。立つ子遣ふ子の取沙汰。其被官たる我が夫父上。●身身の果いかゞと案じ暮せば夜の目も合はず。遺る方なさの御物語第一不便は此力若。子孫長久の御思案はあるまいか。頼み少なき世の中やと打萎るれば父の齋藤溜息つき。●ヲ、女心に悔むは尤も。神國の大日本朝敵となつたる者子孫續きし其例なし。近くは平相國清盛入道。唐土天然が攻め來つても傾くまじき勢ひも。●朝綱義經の仁義の武勇に切立てられ。一門の大勢西海の波に沈みし是ぞよき證據。今鎌倉の惡逆驕り。神明佛陀の怒りの矢先情みの録先。●目目こそ見えぬ八方に迫ると思ひ給はぬ淺ましさを。其被官たる舅男。六條河原獄門にか

からんは案の内。今更何と詮方なき。弓矢取る身の、フ淺ましさを。●只忘るまじきは後生菩提。ア、南無阿彌陀佛といふ聲を外に立聞頼員。ム、扱は女房が内通にてはなかりしな。さもあれ何をか口走ると。●鼻息もせず聞き居たる。●斯くとは知らず女房扱は父上も。左程鎌倉六波羅を疎み果て給ふか。其お心を聞いて胸が落着いた。●大内にも數年鎌倉を御恨み。今度宮様お位に即き。六波羅殿失禮非道の我儘。逆驕り以て外の無禮講に事寄せ。●六波羅追討の御謀叛極り大塔の宮御還俗。征夷將軍護良と名乗り。官軍の總大將夫の頼員殿は元より。右近府の侍所一方の物頭。●舅は敵の侍大將。すは軍に臨んで先づ一番に望むは舅殿の首。恨みとばし思ふな弓馬の家に生れし役。力なしとの悔み言。●夫と親との敵味方どちらへ勝負がつくとても。悲しき

者は自ら一人。天命に盡き果てし六波羅に與するは。毒と知つて毒を呑み淵と知つて淵に沈む無分別。夫諸共天皇の御味方に参り。六波羅さへ亡ぶれば聖も男も手柄は一つ。天下のため家の爲たつた一人の此力若。子孫の爲と思召しお心を離へし下されかし。是を申す爲ばかり。氣の堅い頼貞殿に酒を強ひて寢入らせ。家來どもにも隠し忍び。徒歩既の私が心御推量遊ばせと。語る詞の内より齋藤大きに驚く面色。眉を蹙めつ目を見出し膝押し掩り洗面作り。返答胸にあぐみし體。外には頼貞現は女房が男を味方に引入れん心ざし神妙く。サア舅の詞が勝負の初め。返答によつて雨戸一重。蹴破るは安かりけりと。五音に。氣を附け聞き居たる。父文案を極め座を打つて。

のつま戀に。おのが在所を人に知れつと云ふ歌覚えつらん。雉の雌鳥が雛を育てん其爲に。番はなれて春の草に隠れ伏す。雌鳥は雌鳥を慕ひほろゝを打つて焦れ啼く。其聲を知るべに獵人の畏箭先に罹り。焦るゝ妻には逢はずして。其身を失ふ。是を畜類の愚かなるに譬へて。あさる雉子の妻戀におのが在所を人に知れつゝとは詠じたり。まづ其如く夫を思ひ過して。却つて天皇の御謀叛を觸れ歩く。鎌倉譜代の勇士六波羅重恩の齋藤太郎左衛門。孫の娘の聖のなにとに惹かされて。返り忠の悪名を長き世に残すべきか。天皇に與するせぬは返答に及ばず。コレはに釣りたる太鼓を見よ。すは六波羅の御大事とあらん時。人數を集むる合圖の太鼓。預り置きたる七百餘騎を引率し。短兵を取り控ぐは我が役。其爲に過分の所領を賜はり妻子を養育む

榮耀。おのれを育て土岐が方へ縁に付けしも。皆鎌倉殿より賜はつたる所領の力。其恩を振捨て、今更天皇の御味方に與せよとは。此齋藤が武士道を捨てさるか。土岐右近の藏人といふ雉の妻戀によつて。天皇の御謀叛を知つたる我は藏人。今宵の内大内へ逆寄せにして忠義を顯はすは此時。恨むるな女但し汝も我が娘土岐が妻ならば。今此親が首打つて寂覽に供へ。夫の忠節を勵ますか但し太鼓を打つて人數を集め。此方より攻め掛けうか。サア返答いかに思案はいかにと。押追取つて立上れば。なう情なや父の武士の廢る事。たつてとは申すまじ草木にも心置く帝の御謀叛。我が口から顯はれては夫も面目失ふ。何事も聞かず知らず顔殺密になされ下されと。持ちたる押を抛放さんと腕に縋り。太鼓の面に立塞がり。泣き叫び口説く聲。聞くと等

しく。頼員腰の刀すらりと抜き。弓矢の  
小脇にぐつと突立て大音上げ。天皇  
御謀叛一味の武士右近府の侍所。土岐の  
頼員生害に及ぶ。騒がれ齋藤殿、男殿  
と呼ばはれば。親子驚き雨戸障子を引退  
け引開け。駈出づる縁先突込む。元血は  
溜つ潮。女房是はと取付けば、幼けれど  
力若が。父様なぜに切腹なさる。侍  
の立たぬ事で切つてよくばわしも腹を切  
りましょかと。目には涙を持ちながら  
ッ訶に見えたる氏素性。男齋藤からか  
らと笑ひ。ヤアラ事可笑しや。天皇の御  
謀叛に與したる土岐頼員といふ一方の物  
頭。矢の一本も射出さず。此齋藤が武勇  
を雨戸越しに聞き怖ちして。腹切る程の  
臆病者。兩六波羅を敵に持ち鎌倉殿を亡  
さんなどは。盛火を以て満月の光を  
消さんとするに同じ。ならぬ事及ばぬ  
事。孫も娘も此手負ひ連れ歸れと。云

ひ捨て入らんとすコレ。齋藤殿。武  
邊も忠義も誰に劣る頼員にはあらねど  
も。天皇の御方には御謀叛の企てばか  
り。いまだ人数の手配りも定まらぬ其先  
に。御謀叛願はれ逆寄せに寄せられて  
は。味方の收軍目の前。將の謀計洩る  
る時は其軍利あらずとは此事。味方の爲  
を思ひ過ごせし女房に恨みもなく。忠を  
守り義を勵む男殿。武士の習ひ是以て  
尤も至極。所詮かゝる大事を。ふかふ  
かと女房に打明かせし我が粗忽。一生の  
不覺武門の瑕。弓矢神正八幡。摩利支  
天の御憎しみを晴らさん爲の生害。三十  
年來夢空々。須彌山碎けて磐石に花開く  
一喝と。叫んで突込んだる刀一刺り。刺  
つて抜くより早く俯伏しに。つかつばと  
伏して息絶えたり。女房わつと泣く泣  
くも許して下され頼員殿。味方の勢の一  
人も増す爲に。なまなかな女の忠信だて親

の心を見損なひ。御大事を語りし故大事  
の武士をむざくと。殺したる誤りはも  
と自ら。エ、曲もない父様。侍が侍の  
道を守るに珍しい事か。物の哀れ情  
を知るを誠の勇士と云ひます。色一人  
の娘一人の輩一人の孫を見殺し。お前  
人が義を立てぬき。さのみ仁義とも忠節  
とも言はれまい。かたくな、父様のお心  
とは夢にも知らず。此女が舌三寸の誤り  
で。大事のくいとしい男大事の武士を  
殺した。科人は此女酷いつらい惻愍心な  
父様と。エ、恨み亂れ歎きしが。いざ  
来い力若死出の山へ追付き。父様への言  
譯と刀追取り引寄するを。飛びかゝり孫  
を抱き上げ娘をかつとは踏退け。エ、  
淺ましい。徒死したる夫の憤りを。散ぜ  
んと思ふ心はなく。一子を殺し我も自害  
し。親子三人犬死して。天皇の御味方に  
頼まれし證は何と。よし、無分別の

父母は兎も角も。此悴は我孫養育して人となし。誠の武士の子を育つる手本を見せん。此齋藤を情も哀れも知らぬ。かたくなに親とおのれが目には見ゆるか可愛いやな。昔保元の軍に。源氏左馬頭義朝は内裏方。父六條の判官爲義は院の御所方。親子敵味方と立分れ。鋒を争ひ鐵を磨き。終に院方敗北し。義朝の手にかけ父爲義の首を打たれし。恩愛親子の合戦に涙一滴零さねども。鯨波矢叫びの音迄も天道誠の御耳には。親子愁歎の悲しみの聲と聞し召す。我は主君のため六條の判官爲義の心を以て。現在の掣に敵對す。おのれ等も君の御爲。左馬頭義朝の氣を以て。親の首をも打たんと思ふ心はなく。情を恨めしい父様胸愆心な父様とは。掣や娘を憐みて。此齋藤が泣く聲は汝等が耳へは入るまいぞと。はたと

罵む。ツシ目の内の涙ぞ。聲に先立てり。

力若實く祖父の目の色見て取り。是母様なぜ泣かしやる。今日からはわしも六波羅方。色わしが首斬つて父様の名を上げて下されと。涙を見せぬツシ調つき。エ、未練至極子供に劣つた女め。戰場に臨んでは親とても通さぬと。一言いうて歸らぬか何とく。あいにく申しまする。これ敵味方となるからは。父上とて用捨はない。齋藤太郎左衛門の首は。土岐頼員が女房早咲が取つて見せう。是ア天道赦して下さんせとわつと叫べば父は猶も親子名残りと泣く聲を。紛らす合圖の陣太鼓哀別。離苦こそ。世の習ひ。齋藤太郎左衛門利行が注進によつて。御謀叛の事隠れなく天皇を捕り奉れと。六波羅の軍奉行隅田彈正少弼に。四十八ヶ所の籌在京の勢をつけ。七條河原に軍立て齋藤太郎左衛門利行。床几を並べ軍勢を點檢す。思ひ。思ひの家の旗

眞先に押立つる。青黄赤白紫や五色あやどる紋の綾。小旗吹貫様々に映り心や染色は。柳櫻にあらねども。都の錦と疑はる彌盛心や武士ども。手を盡くしたる馬皆具。物の具晴れに出立ちしは。花やかなりける風情なり。齋藤太郎左衛門采配おつ取り。諸軍勢の假名實名一々。オウリ次第に尋ねけり

### 着到馬ぞろへ

ハリ先づ一番に小櫻織の胴丸に。五枚兜を猪首に着なし紅の母衣を掛け。兵庫鎖の丸鞘太刀雲雀毛の駿足に。夕日いざよふ唐紅の鞆を。芝打長に掛けなし。足取り軽く歩ませしは。天晴れ出立ちや誰候。是は大相國清盛の苗裔。八條入道清玄が孫。八條右金吾平の清澄。郁芳門の寄手候。シテ修二番に唐綾織の鎧。鉞形打つたる柿形兜。澁染め手綱に萌黄の

母衣。霞に嘸ふ青の駒。オクリ土踏みへ立て、花薫るこぼれ櫻の蒔繪の鞍。五色の厚總かけさせしは。いかにく〜と尋ねける。フさん候某は。清の黨の旗頭。地葛西の忠志。フシ春國とぞ名乗りける。シチ地三番に白黒緘。胡麻幹小札の大鎧。眞紅の鉢巻むすどと緊め。黃母衣に木地の鞍置かせ淺黃手綱に黒の駒。乗つたる武者は。フシ誰やらん。フシヘリされば候某は。濃洲方縣の城主明石播磨之介貞朝。談天門のナホス地攻め口は。フシ我手なりとぞ答へける。シチ地四番に名にし逢坂の關の。岩角踏鳴らしオクリ山立ち。出づる桐原駒。沃懸地の鞍置かせ。萌黃緘に。フシ紅梅濃。桃形兜に白の母衣。問ふに及ばずよく知つたり。名古屋の前可候な。ツレげによく知し召されたり。此度の我が攻め口。美福門を受取つたりと。しんづ〜と打つて過ぐる。シチ次に鋭き駆武者二騎。宿月

毛白の駒。紫手綱紅手綱。燃え立つ火焔鍋尻兜。地折咲く花の山吹緘。卯の花緘の腹巻に淺黃鬘金の母衣かけし。ゆ〜しき出立ちは。フシ誰そや誰そ。ニ人誰ぞとは人がまし。陶山時秀河野治國。安嘉達智の二門を受取り。前後の争ひ事急なり。馬上御免と乗り過ぐれば。ツレ地彈正二人を呼び返し。互に拔駆け御禁制。高名ありとも手柄にならず。備へを立て〜向はれよと。フシ屹度戒め通しける。シチ地續いて蹄に雲を踏む。月毛の駒に丸箱年は。三五の上もなく契に蘭麝の。風薫る。花橋の梨子地の鞍。金糸銀糸を小波打ち。より糸の厚總掛け。母衣は紅。シ水淺黃。二色革の小札。の鎧。足利様の染手綱かつし〜と。歩ませたり。ツレ地負けまじもと乗り續く。同じ齡の勝色緘獅子に。牡丹の裾金物。ハリ打つたる鎧。鐵形打つて龍頭。綾の母衣掛け錦の轡。

金覆輪の鞍置かせ。黒栗毛の毛もおさすいかな。野飼ひのナホス荒駒も君が手綱は逢ふ夜の床よ。撫ぜ〜。引寄せて。フシゆらりと乗つて出でたるは。誰人の子なるらん聞かまほしと尋ねれば。シチオハリさん候我々は。陶山が一子太郎英平。河野が三男三郎國經。今を初めの軍の供と手綱。靜かに歩ませて。大様にぞナホス通りける。ニ人扱其外伊勢平氏美濃侍。近江に山本木村姉川。伊賀に服部三河に。足助矢矧武者。色々の物章萌。黃緋緘白檀麝。啄木花草藤緘。片白。片取。染草澤瀉柑子革黃糸白糸紫緘。さて又馬は連錢茸毛虎月毛。四つ白足白額白。柑子栗毛姫栗毛心々の鞍置かせ。思ひ〜の。コハリ手綱をかけ。照る日に輝く物の具は一入色ぞまさりける五色の母衣が入り亂れ。乗出したる武者の數以上三百七十騎。雑兵二萬七千人。河原狭しと乗り連れた

り。小波や〜。濱の。眞砂はナカミ盡く  
るとも。平氏の威勢はよも盡きじ。萬  
歳樂と喜びの鯨波を作りて。三へ押寄す  
る。

朝恩を忘れ武威に誇る六波羅勢。内裏  
の四門を打破り。喚き叫び戦ふ有様。濕  
雲の雨を帯び暮山を出づるに異ならず。

君の大事を徒らに死したる夫の名字の穢  
れ。我一戦に洗ひ革鎧輕げの女武者。心  
も名に負ふ早咲が花に染めたる母衣打掛  
け。六波羅勢の裏切りし我強き父に鼻明  
かせんと。近衛通りの松蔭にオリ身を引  
き。そばめ親ひ居る。敵は多勢。軍に  
刷れて陽明門を攻破り。官軍數多討死  
し。大將大塔の宮護良親王。赤松律師則  
祐平賀村上主從四人。虎口を切り抜け一  
先づ南都の方へ忍ばんと。笠印かなぐ  
り捨て欺く敵の袖印。是は當手の使ひ  
番。味方の利運を六波羅殿へ注進。各の

高名も一々に言上と。色高らかに呼ばは  
り〜。靜かに。落ちさせ給ひける。  
早咲きつと見すは。是こそよき敵と並木  
の蔭より躍り出で。右近府の侍所。土  
岐藏人頼員是にありと。名乗りかけて  
斬りかゝる平賀の三郎駆け隔て。ヤヤ  
土岐頼員とや。事々しい大將呼ばり。萬  
乗の君に頼まれ奉りし一大事敵に洩ら  
し。宮に向つて太刀三昧。面は侍心は著  
類。刀の穢れ捻ぢ殺してくれんすと。  
怒りかゝればはつと驚き。飛退り地に  
平伏し。扱は大塔の宮にて渡らせ給ふ  
か。勿體なや畏れあり。我こそ土岐が女  
房早咲と申す者。恥かしや情なや。數な  
らぬ我が夫の魂を侍と御覽じつけての御  
頼みは。名の譽れ身の大座。殊に自らは  
若官の御母后。三位様の御慈悲にて命を  
助かり。御媒介にて夫婦となりし頼員。  
骨を粉にはたかれ屍を溝に曝せばとて。

君の  
御爲夫の爲只管に思ひ過ごし。片意地  
の親を語らひしより御大事敵に洩れ。夫  
夫は不覺の最期といひ。さもし侍卑怯  
者。土岐頼員が返り忠と瑕なき玉に瑕付  
けて。人に疎まれ笑はれ一人の親は敵と  
成り。世に便りなき女身。名ある  
敵の首取つて。せめて夫の修羅道の迷ひ  
暗らさんと。一途にはやる心より。御  
印を見違へ宮に向ひ奉り。只今の尾籠眞  
平御免ある様に。取成してたべ侍達  
と。大地にかつばと打伏して口説き涙草  
葉の露。鎧の袖を絞りけり。彦四郎  
あざ笑ひ。ヤヤ古狐の骨張。ぬつべり  
とは化かされず。左程義を知る頼員が女  
房。など味方へは參らず。母衣袖印に至  
る迄六波羅に從ふ赤印。口は官軍形は六  
波羅。思ひがけなく我々に出つくはせ。  
口先で塗り付ける内股膏藥。其手は食は



ぬと脱付くれば。其御替めは尤もながら。日本無双の方々へ手に餘る大軍に女の腕立て。犬死の端と思案し出立ちを六波羅勢に。驚き似せたる一つの功を御覽せと。母衣引きほどけば宮の御運枝八歳の親王。濁りに染まぬ速葉の汚泥を出づる御靴。村上呆れて大聲上げ。扱も嫌業出来された手柄。も御手を取り、御前に移し奉れば。宮も不思議の御對面。兄弟再び相逢ふ事。女房が忠節。此上の、あるべきか。味方の勢を催し敵を一時に挫かん爲。親を語らひ時によつて變化する。味方の天運は名將名士も免れぬ所。聊も不忠にあらず。頼員が敢へなき最期。思へばあつたら武士を。失ひし残念さよと忝くも御大將。着長の袖を絞らせ給へば。天魔を挫ぐ赤松平賀村上も。共に涙にむせびける。女房額を地に摺付け。物數ならぬ御奉

公身に餘る御感の詞。末代の譽れ此上や候べき。とても事に夫諸共聞くならば。此嬉しさはいかばかりとエテ盡きせぬ涙。繰返し。悔む心を取直しすんど立つて身繕ひ。サア此世に思ひ置く事なし。敵陣に駈入り討死し冥途の夫に喜ばせん。お暇申すと駈出づるあれ止めよとの御聲に人々縋り押留むる。大將甚だ御感あり。勇みあり頼もしさりながら。斯く討ちなされし無勢の味方一騎當千の女。暫らく存へ我に仕へ。幼き弟の若宮おほし立て得させよと。様々制し給ふにぞ死するも生きるも君が爲。冥加に餘る御詞と。猶々感涙せき敢へず。刻移れば赤松則祐。宮を諫め早御開きさりながら。御運枝一所に落ち給はば行先怪しみ奉らん。コレ村上平賀。御遊達は大將の御供し南都の衆徒を語らはれよ。某は早咲諸共此若宮を守り奉り。御

父天皇の御安否を開き合はせ。跡より追付き参らせん。尤も四方の御敵いまだ散ぜず。いざさせ給へと諍光。大塔の宮を供奉し参らせ。足早に。別れ急ぎける。勝ち誇つたる六波羅勢。網絡の張輿昇かせ聲々に。叛逆の棟梁後醍醐の天皇を擒にし。六波羅へ成し奉ると先を拂つて進み來る。赤松遙かに見るより早く先に立ちたる軍勢ばら。張りのけ蹴倒し立塞がり。播磨の國の住人。赤松入道圓心が三男律師則祐。天皇の御迎ひ御心安かれと。鞍の端を片手に掴み。こりやくと押戻す。輿添の帯刀五郎聲をかけ。なんの赤松意地張らば打碎き。割松坊主にしてくれん急げくと數十人。輿に取付き押せども押せども動かばこそえいや。えいやの聲ばかり。手足は痿えてうど雲ふ。則祐につこと打笑ひ。ハ、ハ、ハ、赤松肥しの葛

弱めら。地盤堪へて見よやと一引き二引き  
撞木につかせ。大地へどうど引据ゆれ  
ば。それ除すなと打つてかゝる。掘潜り  
引きはづし。手に合ふ者を引掴み投げ越  
し。残る奴ばら。フシ除さじやらじと

追ひかくる。地盤早咲嬉しく若宮諸共御輿  
に走り寄り。なう勿體ない是こそ御父天  
皇様。畏れ多や淺ましや。假初の行幸に  
も。網代糸毛の御輿車に召されし玉體。

山賊夜盜の囚人同然。此繩網は何事  
ぞ。地サア御對面遊ばせと網切り開く輿  
の中。天皇はましまさずこはいかに。隅  
田彈正ぬつと出で若宮奪ひ取り駈行く  
を。腕掴みにしつかと組留め。胸エ、腹  
の立つ誼られた。汝にむぎくと渡さ  
るかと引戻せばはつたと腕め。官軍に  
與する殘黨輩。片端に生捕らんと彈正が  
智慧の網。赤松めに一杯喰らはせ。小鳥  
網で鶴をせしめた。運強き六波羅殿。の

じ張らば一刀放せくと怒り聲。ヲ、斬  
らば斬れ大體の女と思ふか心は鐵石。汝  
が首の千や二千に代へる様な若宮なら  
すと。地もぢつと引きつ捻ぢ合ふ後に。

隅田が郎等帶刀五郎眞二つと斬りかくれ  
ば。ひらり外す早業早咲抜き合はせ斬り  
合ふ隙。隅田彈正若宮掘込み落ち失せた  
り。南無三寶宮様を奪はれては。もう  
命も何も入らぬ。せめておのれを。冥途  
の供の小丁稚と。無念の切先願志の刀

金。薙ぎ立て斬込む死物狂ひ。さしもの  
五郎堪へ兼ね。ひるめば透かさず取つて  
捻ぢ伏せ。首打ち落し立つ所に。地色い  
づくよりとも白笠に染羽の矢一つ來つ  
て。胸板にはつしと忽ち眩む心を取直し  
取直し。胸エ、是程のへるく矢に。何の  
そのと踏直す足はよろく。踏立  
つればどうど伏し。又起上り太刀を杖。  
無念くと四方を睨む眼力も。次第に弱

る深手の矢疵。ナウ赤松殿。則祐殿は  
いづくにぞ若宮を取返してたべなうと。  
魂ばかりは亂れぬ烈女。形はほつきと  
折れて若木の早咲が。閻浮の花は散り  
てげり。敵を左右へ斬磨け。立歸る赤

松則祐あますなやらじと隅田彈正。駒を  
進め大音上げ。討洩らせし大塔の宮。  
赤松入道が知つたらん。駿馬の蹄にかけ  
惱まし生捕つて拷問せん。ヤア騎馬の武  
者ども。掛かれやくと詔勢を勵まし乘  
廻せば。馬強なる若武者ども我組捕ら  
んと腹帯締め。鎧蹴そらし諸手網。馬を

蹴はせかくを入れ。尺寸の地も余さず  
フシ衛並べ取巻いたり。律師則祐えせ  
笑ひ。生捕るとは事をかしゃ。譬へば周  
の八疋項羽が驍。呂布が赤兎馬我朝の鬼  
鹿毛なりとも。シヤ物々しと大手を擴  
げ。駈來る馬を弓手へ背け馬手に外し。蹄  
る馬を撞潜り。轡を取つて引廻せば。

鎧よろいに懸かけんとはたと打つ。打てば沈みひらりと飛び。尾筒おしづつを取つて跳ね返せば。落ちじと堪こゆる腰手綱こしづな。もぢつてかゝれば太腹潜ふたはらひつて蹄を避け。爰に現はれかしこに潜ひそみ。五騎も十騎も跳はね飛越し。人馬を惱なます神通力しんとうりき。逆輪さかづまに懸かけて組みとめんとひたぐぐと打寄する。駒の足並あしなら鞭むち丁々。障泥しやうにの音はぼんはかしつたんさらく。地ちさらくさつと寄手は引かぬ片手綱かたてづな巻立てる波の紋なみのいざな。左巴右巴くるりくくるくくる。くるり。くるくる。三重さんじゆうへ駈立か立つる。地ち子房こぼうに劣らぬ赤松則祐すねゆき身は山雀やますずめの摩耶まゝ育ち。くるみ返りの飛鳥とびの術。あらぬ方にすくと立つて小躍こよくりし。フシあら面白おもしろの牧狩まきうや。三津みつの御み牧まきか鳥飼とりかひ牧まきか。信濃しんぬに望月もちづき桐原きりばら牧まき。甲斐かいに黒駒くろこま立野たちのの牧まき。武藏むさしに糠坂ぬかざか小野このの牧まき。生國なまくに播磨はりまの家島駒いへしまこまの牧狩まきうかや。此赤松こしかが望もちむ馬まは彈たま正ただ少せう駒こま。地ち瘦馬しうばどもに目は

懸かけじと。太刀抜き騎かし平首ひらびし前まへ脛しん難がたき廻まわれば。そりや馬崩うまぶし叶はぬと。辟易へきえきしてぞさつと引く。大將たいしやう最さい景けい任にん度を失うひ辟道へきだう指さして逃にげて行く。ヤア逃にがしはやらじと走り着きき。地ち上じやう帯おび綱づなみどうど打付うちつけけ乗掛のりかけり。大塔おほいたかの宮みやの御み在所しよ責せめ問とはんとは。口のこはいじやく馬まめ。天皇御てんかうご父子ふしの御行方ごぎやう。おのを今拷問いまごうもんする。赤松せきまつといふ名馬なまの駈足かあし。地ち助すけ腰こし骨ほね踏ふ碎くだかんと續つけさまに踏付ふけられ。ア、申し申まをし。天皇様てんかうさまも若宮様わがみやさまも六波羅むつばらに御座ござなさる。連つれまして來きて手渡てわたししましよ。馬うまちや。馬うまちやと泣なき叫こゑべばからと打笑うちわらひ。君きみを苦くるしめ奉ほうる天罰てんばつ應おこへたか。數多かずた討うたれし味方あじの弔なぐさひ。早はや咲さが追善おひぜん供養くじやう。律師りしんが布施へんしには取り足たりあらぬ。汝なんぢが首くびは精進料理しやうじんりやうりの間引まひ菜なと。地ちシちよいと引ひ抜き捨て、げり。大將たいしやう討うたれ餘あまさじと又またむらくと寄來よきる騎馬かば。轡ひづりの下したを潜ひそ

ると見えしが。四足よあしを兩手りゆうてにしつかと握にぎり。馬うまも人も一ひとぐるめ。日ひより高く差さ上げ馬うま礫いし食くららはせんと。群ぐんが中なへ投付なぐれば。右みぎ往ゆ左ひだり往ゆに逃にげ散ちつたり。地ち相手あひま手てなければ是迄こゝなり。六波羅むつばら彌や天てんの暴逆はうぎやくなりとも。神かみの御末みすえの天皇御親てんかうごみ子こ志しはあらじ。無念むねんを忍しのぶは暫さ時の内うち。大塔おほいたかの宮みやの令旨れいしを賜たまはり。父ちち圓心えんしんを始めとし。河内かふちの國くにには稱正成せうしやうせい。備後びんごに小島櫻山こじまざくらやま。四國しこくに得能とく士居しきの一族いちぞく。東あづまに足利新田あしかがしんの小太こた郎らう。諸國しよこくの官軍くわんぐん賤せんじ合せ。六波羅むつばら鎌倉かまくら踏ふ潰くだし。公家くわが一統いつとうの世よとなさんは。決定けつじやう一條大宮いちじゆうたいみや通とり。九重ここのへ過ぎて宇治山うぢやま越こえ。大和路たいわろ指さして。おゝくくく。大塔おほいたかの宮みやの御跡ごあと慕まひ行くゆは赤松せきまつ。律師りしん力ちから士しが那羅延力ならえんちから。三千世界さんぜんせかいを一ひと跨またげ。飛とぶ火ひの野邊のべの名なに高たかき般若はんにや寺てらへ。とぞ急いそぎけり。

第三

●みやびやかなる女あり車を同じうす。  
類舞の花の如しと語ふ。齋衛の二風道を蕩し國を賊ふの淫聲といへどもよく讀みよく用ふる時は却つて國を治むるの誠めなりと註せり。常盤駿河守範貞は齋藤太郎左衛門利行が忠烈にて。大内の御謀叛はれ官軍の多勢に討ち勝ち。大塔の宮御行方なく落人と成り給ひ。後醍醐の天皇を隱岐の國へ流し還し奉り。八歳の若宮並びに御母君三位のお局諸共に擄とし。永井右馬頭宣明に預け嚴しく守らせ。其外宮々公卿大臣に至る迄。武家に背きし輩を死罪流罪に苦しめ。氣烟麿の如く揚り。威勢雷の如く響き渡れる六十餘州。フ頭を上ぐる人もなし。●はや初秋の風の色白書院の敷居越し。齋藤太郎左衛門利行。召しによつて參上と

手をつけば。●駿州見給ひヤ太郎左。早速の出仕太儀。●サア直ぐに是へくと招けども。ハツくとばかり色代す。●ハテ入らぬ辭儀手を取りに立ち申さうか。是はく御意を背くは結局慮外と。●奥詰め御禮代お側衆を乗越えて。大將と膝組にフ媚なくぞ座しにける。●なう太郎左。此間も云ふ通り今度一戦に切勝つ事。此範貞が武略にもあらす。諸軍勢の働きにもあらす。御邊獨りの娘聲を見殺し。逆寄せにせし忠勤一人の高名。●則ち鎌倉へ言上追付け恩賞大國の主。何れも列座の面々。侍たる身は太郎左を手本。あやかれくと譽められてにつこともせず。●忠を磨き義を鐵石に比するは勇者の守る所。●御加増を食らす譽められ度くも是なしと。人のそやしにふはくと。乗らす乗らせぬ人喰ひ馬ッあひ口。挨拶もきどなり。●ヲ其繕ひなき眞直ぐを見込み。頼む事ありて召し寄せたり。語り出すも恥しながら。範貞は此頃戀といふ大病を受け。お見やる通り顔も瘦せ身も衰る。此病の起りは。永井右馬頭に預けし若宮の母君三位のお局。●思ひ直し氣を變へても心の療治七廻らす。玉章にて口説かんでも俗筆の假名文。手風卑し文章不束など。内裏上藤なま上達部に嘲弄せられては。常盤駿河守とも呼ばれ鎌倉の御名代。關西三十三ヶ國大將たる身の無念大恥。いかがと思ふになう思案もあるもの。幸ひ若宮。時分柄町々の踊を好き給ふと聞く。益の間は京童の踊子ども。右馬頭が屋敷へ入れ宮の御心を慰め。煩らはせ參らすなと言付けし詞の情。●子に迷ふ母お局の心を先づ和らげ。其上に我戀の思ひを形取り。燈籠の作り物に模し。媒介は右馬頭女中ながらさすが雲の上人。文の

代り燈籠に物を言はせし趣向に絆され靡くといふ返事を又燈籠にて送られし。嬉しい心底見せ申さん。扨従ども君が方より返事の燈籠はへく。あいと答へて奥扨従も他生の振合せ。誰が袖なりや色深く。染めて千種の。花車。祭る未來のなき魂より。生きて此世の戀路の闇。照らすばかりの風流なり。はお見やれ。最初に此方より根笹の燈籠に水晶の玉を飾り。上には蕨が羽を伸し鯉を掴む作り物。戀に心は為立つばかり根笹に霰。觸らば落ちよの心を悟り。袖をかたしき二人寢んとこの返事のたが袖。又此方より松に紅葉の燈籠。焦れ待つとの心を受け。色に惹かれて巡り寄るとの此花車。辱けない。太郎左。太郎左聞いてかくと。言へども更に見向きもせず。野ではござらぬ。頼み度き事ありとのお召し。取敢へず参りしにどれ何を頼む

事。當分軍鎮まれども。大塔の宮行方知れず。近國の武士過半心は天皇方。味方の鎧兜ゆるりと脱がれぬ此時節。まだまだと戀話。弦をせき矢の根を磨くに隙ござらぬ。燈籠より兵糧の用意罷り歸ると立たんとす。ヲ、親爺氣短な。始めを云はねば未聞えず。斯く戀は叶ひながら迎ひの車乗物にて。幾夜待てども今に來ず。女の迎ひに若き侍も氣遣ひ。老足の太儀ながら今宵かの君を迎ひに。親爺。頼むといふ顔をじろりと見て。罷りならぬ。齋藤太郎左衛門利行。一生に出合女の取持ち致さず。始めより媒介の右馬頭に仰せ付けられい。夜に入り辻に立つ夜發の遊女の支配する。妓夫とやらもうとやらの業。侍のせぬ事。若し三位の局。首引き抜いて参れなど、の御用は。幾時何時にも仰せ付けられと。重ねて取付く詞なし。お次の間より。薰物

のさつと薰りて御取次ぎ。水井右馬頭宣明が女房花園。三位のお局様よりお使として参上と。聞きも敢へずヤア其便り待ちがね山の時鳥。早う聞きたいくと。招くにおめぬ侍の奥方の威は生れつき。三十路餘りに老暮れながら疊觸り詞つき。色香残りてうづ高く。夫右馬頭お預りのお局様へお文代りの燈籠。優しい御趣向感じ入らせられ。あなたも燈籠のお返事。其上に此お浴衣襦袢はお主のお好み。磯打つ波に帆掛け船。殿様のお風を閉きを受け。思ふ港へ焦れ寄らんとのお物數寄。残暑のお汗取りにとの御口狀と。肩に掛けしを取る間遅しとしがみ付き。やれく。夢か現か嘘か誠か。我が戀風を帆に受けるは。あつちからもほの字ちやの。おれにほの字の帆が見ゆる。是奈ない天の羽衣と顔に當て顔に當て。ムウくウ伽羅く。君が移

り香抱き寄せ。縮付け紙り付き。大將の  
甘い顔齋藤が濛い顔。濛いに甘い柿の  
本。ほのくほの字。阿房のほの字。し  
つもると知らぬ愚かさよ。やうく心落  
し着けやイ花園。是程のお情に。迎ひ

をやれども雨が降る風が吹くとて。雲つ  
ひに枕を並べぬは底意が解けぬか気が苛  
れる。心が揉めるどうぢやくとありけ  
れば。ア、お氣のせくはお道理。又あ  
なたにも尤も。私夫婦がたつて申せば。  
涙を零してなう花園。貞女兩夫に見えず  
忠臣二君に仕へず。武士と女の義理は一  
つ。天皇様のお日をかすめては末代迄女  
の悪名。六波羅殿へ申し。天皇様かねて  
お願ひの通り。隠岐の國より還幸なしま  
し。鳥羽の薬家の古御所に置き參らせて  
下されば。若宮様を手渡し、此身はお暇  
申し受け。若宮様をいづくに障り支へもなう六  
波羅殿と添ひ度い。さも無うては下々の

女の間男。同然とのお話。厭と云はれ  
ぬ尤もな御心底。鬼角天皇様さへ還幸  
なればお前の戀はするく。一天の  
君のお願ひひひ。ア、嬉しやと思し召さ  
ば。皆殿様の冥加お身のため國土の爲。

女の及ばぬ智慧ながら。天下太平の瑞相  
と存じますとぞ申しける。尤もく。天皇の目を盗みては女の道立  
たず。我も男の義が立たぬ。願ひの通  
り天皇を呼返しても何事かあらん。膝と  
も談合太郎左衛門。分別何とくと云ふ  
を打消す尖り聲。余程に盡くさつしや  
れ。膝とも談合とは似たかくの事。此  
度敵味方手負ひ討死何千人。京鎌倉の騒  
動は。天皇を流すか六波羅殿の切腹か。  
二つ一つの堺をやうく討ち勝ち半年立  
たず。太刀刀の血も干ぬ内。天皇を還幸な  
し。打洩らされの宮方隠れ住む眞中。王  
城より一里に足らぬ鳥羽の御所に天皇を

置くとは。火煙箱に煙箱入れて晝寢する  
より危い事。斯く申す太郎左衛門。智娘  
は忠戦の刃に死し我は六十に手が届く。  
命を塵とも灰とも存ぜねば追従云はず。

齒に衣着せぬ談合はお氣に入るまい。永  
壽命長久子孫繁昌後の榮花を樂しむ。永  
井右馬頭に御相談と。膠も。しやく  
りもなかりけり。花園くわつと色を緞  
め。膝に膝を突掛け。これ。齋藤太郎  
左衛門殿。口上が過ぎる聞き憎い。又し  
ては忠戦に死せし娘とは。娘の討死が左  
程自慢か。ヲウそなたの氣では珍しか  
ろ。縦へ女でも其家に生れては。人を斬  
るも討死もこちや珍しうないわいの。し  
たがそなたの娘の様に夫に無駄腹切らせ  
大死さする様な事は此花園は得せまい。  
是ばつかりはならぬわいの。イヤお手柄  
ぢや自慢が道理。何ぢやの。命を塵とも  
思はぬとは云やるが管。侍たる身の本

心。壽命長久後の榮花を樂しむ右馬頭とは何故の戲言。云ひかゝつては言ひじらけに濟まざぬ女サア。聞かうと。夫を此ふ男勝り。太刀刀持たせなば。斬りかぬまじき氣色なり。ハレヤレ女中は根強い。申したり饑舌たり。これ其證據は。殿に靡かぬお局の心燈籠浴衣に見えたるを。却つて戀の叶ふ返事と當分御意に入らん爲。戀上ずんべりの輕薄一寸遁れの身用心。命惜しむ證據くくと疊叩けば。ア、置いて貰を埃が立つ。是忝なくもこの男は。腰折れ歌の一首も連らね。連歌俳諧の文字數も覺えた人。何が戀やら無常やら田夫不束なそなたが。あんまり口が過ぎるがの。三人寄れば公界。年寄りの言ひ損ひは見苦しい。サア聞き度い。ヲ、聞かせう。早う云や。ヲヲ云はいでは。あの誰が袖の模様は立つ波。なみはうらに立つと見るが心の付け

所。子供も覺えた百人一首の。恨みわび乾さぬ袖だにあるものを。戀に朽ちなん名こそ惜しけれとの歌の心。天皇を流し。若宮を生捕り苦しむる恨みの涙。乾かぬ人に靡きては。戀に朽ちなん名こそ惜しけれ。口惜しけれと判じたが叶はぬ戀の第一。色に惹かるゝ車とて。權紅葉も指さず薄刈葦萩桔梗。草花繁きはこれ深草。かの少將が百夜の車小野の小町に誑され。九十九夜めに焦れ死す。叶はぬ戀の是二つ。浴衣は波に帆掛け船。思ふ港へこがれ入るには揚げたる帆をもおろす習ひ。此浦船に帆を揚げて沖のかたへ走り舟。海の沖を象どるお局の魂は。隱岐の國へ通ふとの。地下文直不束な太郎左衛門見立て。非言あらは打つて見よ何と。何と、責掛けられ。ハア、さうであつたもの。名歌名句も聞く人の氣々によつて變ると云ふ。まそつとの所へ心附かず。

殿の御前諸人の中で言ひ籠められ。夫も不勘の誹りを得。エ、口惜しい無念なトエ子忍び歎けば伺候の人々。見懸けによらぬ齋藤が風雅。鯉蒸に歌詠みも。見懸けによらぬ事とぞ唾きける。大將艶貞面色變り。乾達婆王の怒れる聲。靡かずば靡かぬ迄。艶貞程の者をぬけくと誑らかす狸女。よし。此返報せんそれ。精靈燈籠持て来いと。外方にとぼす孟蘭盆を思ひ切る名残りの音物。お局に戀代は花園。齋藤太郎左衛門兩人立合ひ。工夫し。此心を悟りし者直ぐに使。口狀は此燈籠にありサア寄つて判じて見よ。畏まつたと花園額を傾け暫らく思案し。ハツア、聞えた。總じて此切籠には四方に四つの角ある物。帝のお願ひ叶はず。地年に一度の精靈となつて還幸なれとの御口上と。引提げて立たんとすヤイ

侍てく。其様に鈍げな廻り遠い事でなし。太郎左衛門智慧に及ばぬか。ハ、ア何の是しき知れた事。切籠とは子を切る。お局の子は若宮。戀の叶はぬ憎しみ若宮を切子のお使。齋藤太郎左衛門承る。ハ、頓智發明黒星く。今宵子の刻知死期迄に若宮の首斬つて見せよと。座を立ち給へば花園駈寄り裙に縋り。若宮の御首を餘人に打たせては。預りの規模もなし太刀取りを右馬頭ヤア皆まで云ふならぬく。然らば檢使を仰せ付けられい。猶ならぬ。檢使太刀取り共に齋藤太郎左衛門はや急げ。爰放せ女めと蹴散らし奥に入り給へば。左右の諸士もばら／＼と。フシ皆々座をぞ立ちにけり。齋藤も切籠ひつ提げ。續いて立つを走りかゝり長袴の裾しかと踏止め。太郎左衛門殿無心がある。大事の預りの生捕り肝心要の落着に。太刀取りも餘人

言渡ししの使も餘人。檢使も餘人に取られ。うつかりと見物する右馬頭何を面目。年寄りに役過ぎた一色渡せ。さもない内は動かせぬと。膝節堅め踏留むる。ハ、こさかしい女郎め。脛骨の折れぬ先退かいでな。イヤ立ちすくみになつても返答聞かねば動かぬ。返答はまつ斯と。引く力踏む力袴の裾はふつつと切れ。躍り出るを飛びかゝり。烏帽子の頭をつかかゝ掴んで引く程に。烏帽子は脱げて。頤に。纏緒かゝつて結び目解けず。鏡を取られし三保の谷はえいやつと云うて前へ引く。是はのつけにしいともやつとも喉叱締つてぎちかはばかり。脊骨を打たせて仰向けに。どうど引据ゑ燈籠もぎ取り。切籠のお役永井右馬頭宣明と。呼ばはれば起上り。氣の永井ぬるまの頭。武士の眞似仕損ずなど。睨む眼は樟腦玉。燈さぬ先に燈籠の影を。照らし

て 三章

### 若宮紅梅の短冊

天照らす。フシ月日の種の。御身にも。世の浮雲に覆はれて。まだ八歳の若宮御母君。楚の捕はれと傷はしくも永井右馬頭。宣明に預けられ園遊しき二重垣。荻吹く風の音ならで。スエテ哀れこと問ふ者もなし。今日御機嫌伺ひと御前に出づれば。宮は札に何となき御手習ひの藻鹽草。ヤア右馬頭あの鐘は入相か。ハ、授秋の日の短かさよと。御いたいけにらふたげに。打拵ひ給ふ御目元。是はく何事の御述べ。此頃夜な／＼町人の子供を庭へ入れ踊らせ申すも。私の計ひならず。随分宮様を慰め大事にかけよと。六波羅よりの下知。是も母君御物好きの燈籠にてなだめられし故。荒氣の大將心和きてのいたはり。此上にお氣結



ほれ御藥などと候ては。母御様への御不孝。盆の間は御手習ひも御休みと。地押しやる机に紅梅の短冊。御詠歌と思しつて。つく／＼と思ひ暮して入相の。鏡を聞くにも君ぞ戀しき。アツアス程迄御父帝を慕はせ給ふ。平人の子は父母を慕ふにも。只めろ／＼と泣くばかり。俗を離れし天性の。御痛はしさよとばかりにて。顔を傾ぶけ泣く聲に。御御局走り出で。なう／＼叶はぬ事にお心を傷めずとも。時節次第と思し召せ。隱岐の國より還幸の訴歌に花園頼み。六波羅へ遣はせし。歸りの遅いはお願ひも叶ふと。頼もしう思し召せ。此踊帽子踊帽子花園の心付け。我子の鶴千代と一様に染めさせて献上。是を召して鶴千代と仕組踊のしゆらい遊ばせ。サア召させかへんと御手を取り柏長綱引きかへて。浮世模様染め浴衣かざしの花の染め帽

子。花嫁の御腰付き育ち氣高き雲の上。鶴千代參れと父が呼ぶ同じ出立ち同年。委ばかりは見かはずと詞及ばぬ人相を。譬へば空に澄む月と。水の月との如くなり。サア／＼踊ろ右馬頭音頭／＼と宣へば。エ、イ私に音頭是は迷惑千萬。踊りも音頭も見るが上手口で申すは赤下手。女房花園歸る迄御待ち。私はお詫び／＼と云ふ程母君打笑ひ。是は宮様よいお好み。花園は毎夜の事。是非に所望と責められ。顔を蔽めて近頃御無理なんとせう。然らば忘れし所は先へ飛び節のいかぬはどちくちや。拍子違ひ間違ひは御免／＼と。扇を翳し。松竹千代とさ。面白の花の盛りや祇園清水。地の櫻が咲いたか／＼眞盛り。行かうかのハテ行きもせい。天も花に酔うたとさ酔うたとさ。酔うたる色は赤面。山王の櫻の木に猿が三萬三千三百三十三匹下つ

た。猿子抱いてぶら下れ父と娘と打連れ。歌西國順胸に木札の絶ゆる間もさんやれ／＼。いとしけりやこそしと打て。憎か打たりよかおてんと天と手がそれで。それで戀路に迷うたえ。是は／＼隠し藝音頭がよければ拍手も揃ふ。六波羅の物頭永水井右馬頭と云ふ歴々が。若宮の踊なればこそ眞實の御馳走と御喜びの所に。花園切籠携へしを／＼として立歸れば。なうよい所へ戻りやつた。珍らしい右馬頭の音頭。宮様鶴千代揃への踊賑はふ折柄。六波羅殿の返事も囃吉左右。目出度い事早う聞きたし／＼と。勇み給へば猶言はれず襟を浸せる涙の體。ヤア女房。必ず吉左右申すにも極まらず。善とも惡とも泣いて居て済むことか。無調法など叱られて顔を上げ。なうおいとし様や御連が直らぬ。折しも惡う慥貪邪見の。齋藤太郎左衛門が御

前に居合はせ。此頃やうく殿のお心を和らげし。燈籠浴衣の模様さんく悪様の評を付け。右馬頭は何も見分ぬ旨の様に言ひ破り。是れ以ての外御腹立ち此切籠がもなたの口上。お使は即ち太郎左衛門追付け来る筈。エ、くくく腹の立つ。せめて小刀一本あるならば齋藤めが横腹刺つて。御前で美事に死なんもの。面押拭ひおめく立歸り。何と申す詞がない。口惜しい宣明殿とスエテ齒切りし無念泣き。宮御親子怪しみ氣遣ひ給ふ御氣色。右馬頭聰き男子。エ、此切籠合點く。此頃洛中の風説。右馬頭が油断にて宮は行方なく落ち給ふと。誰かが云ふともなき取沙汰。六波羅殿の耳に達し。切籠の四方の隅々火を燈し照らすが如く。日本の果の隅々迄。尋ね探さんとお使。齋藤承りしな。さうであらうがな。なさうか。さうかと目ませて問へば

目ませて受け。アア、アア、いかにもいかにも其通り。齋藤が来るに間もあるまじ宮様に逢はせずはなるまいか。いつかな思ひも寄らず。我を召して直に仰せ付からば。諫言の仕様もあるべし。預りの我を踏付け人も無げの振舞。のめめと宮の御對面罷りならぬ。彼奴諸人の交際なく誰彼を見知らず。鶴千代を若宮にしなし對面させ。利口達する齋藤。一本擔げさせて腹愈せ本望。これ鶴千代。太郎左衛門に逢ふ時立居物腰。宮様をよう似せよ。兩御所は築山の涼み所に竊かにく。鶴千代も先づお供せよ。何事ありとも宣明が。悪しきは計らひ申すまじと申し上ぐれば。夫婦の親切何時の世にッ忘るべき。萬事そこに任ずると。若宮の御手を引き。鶴もこちへと打連れ奥に入り給へば霧に埋る。遠寺の初夜。こうくと。こそ聞えけ

れ。門前に響の音齋藤太郎左衛門利行。上使なりと案内す南無三寶。冥途の使近附いた。なう今の目ませは切籠の心を判じ。鶴千代を身替りに斬る合點か。おんでもない事狼狽ゆるな。ハア、慈悲しや人は情と云ひながら。宮様が相傳の主君でもなし。科もない我子を殺さずとも。まちつと思案はあるまいか。此潮戸際に思案どころか。尤も若宮にさせる由緒はなけれども。我は顔する齋藤めに。人違させ不覺を取らせねば。武士と武士との義もなく勇みなし。鶴弓馬の家を生れし身は一旦の譽れより。畢竟の締りに後指さされては。一代の手柄も水の泡。鶴千代が首打ち彼奴が門を出るや否や我は切腹。お事は兩御所お供して裏門より大和路。大塔の宮へ渡し参らせ周章た體見するな。涙零すな座敷の塵取り。神妙に是へ通せと俄かに思ひがけも

なき。乗りかけた壁に右馬頭。う。騒がぬ  
覺悟ぞ勇士なる。程なく齋藤廣間に入  
り上使なれば罷り通ると上座につき。太  
刀取りお使下拙に仰せ付けられしを。  
御内室遮つて望み。切籠の御口上委細申  
すに及ばず。意よくばとくく宮を  
出されよと。につこともせぬいがみ面。  
ハテ預り人の首打つに何の用意。さりな  
がら上の御許しにて。若宮毎夜の踊今夜  
も何心なく踊帷子。式法の柏に召させ替  
ゆべきか。何さく。首さへ打てば身體  
は裸でも構ひなし。更けぬ先早くく  
とせがまれて心を碎く。父母の教へ忘れ  
ず。鶴千代立出で。ヤイ右馬頭。六波  
羅の使齋藤太郎左衛門とはあれか。齋  
一人に誰々も太儀くくと大人しやか。は  
つと手を突き散ひて。涙に重き夫婦が  
額。エエ上げかぬこそ不便なれ。齋  
藤かつらくと笑ひ。ナウ右馬頭。驚

は眞白烏は眞黒。どれがどうとも人目に  
は見分かねども。汝どちはよく見分く  
る。況や人間若宮の顔ついい見ねども。  
平人の子と天子の子威光でも違ふ筈。推  
量が此餓鬼御邊が一子鶴千代な。サ誠の  
若宮見たい。イヤ見度うても聞き度  
うても預りの宮是ならで外にない。ム、  
確とないか。ヲ、ない。色よしある  
か無いか家探しと。立上ればイヤどこへ  
どこへ。永井右馬頭宣明が住宅。命に  
若生あらば踏込んで探して見よ。兩枝  
斬つて斬下げんと反を打つて脱めつく  
る。ヲ、此年迄言ひ出す詞變せぬ齋藤  
太郎左衛門。反打つた兩腕雜ぎ落ちて  
通らんと同じく柄に手を掛くる。ム、  
ならば斬り落して通つて見よ。サア斬つ  
て見よ。通つて見よと肩間と肩間摺り  
合ふばかり。詰寄せく。既に危く見  
えたる所に。御母局走り出で。齋藤が

直垂掴んで引退け引源を。これ若宮奥  
へ往て鶴千代と踊の用意なされ。ヤイ太  
郎左衛門。ついに逢はぬ三位局よう見て  
置け。エ、まぢくとした此顔わいの。皆  
聞いてたも是が娘早咲は。始め禁中お末  
の宮仕へ。土岐頼貞と忍び合ひに。度々  
晴の奉公を缺く不義の科。兩人死罪に極  
まりしを人は情と思ひ。色自らが身に代  
へ御前を申しなし。命を助けしばかりか  
世間廣う夫婦と成し。其媒人も自ら。情  
の恩を忘れず六波羅を捨て味方に與し。  
恩に命を捨てたわいの。其親舅岩の峽間  
の草か木か。恨めしい物知らずと。人の  
辛さ身の憂さを數へ立て。口説き立て  
聲も。惜しまぬ御歎き。餘所には知らぬ。  
地踊子ども揃ふ手拍子揃へ歌。そよく、  
風に誘はれて。門外へ近く聞えけり。  
地花園涙にくれたがたら齋藤殿。幼  
い宮様事を分けて申さねば。お命取ると

は御存じなし。いつもの如く踊らせまし。御機嫌よい所をだまし討ちに打つたべ。地せめての憐みは一つは。御了簡と手を合はすれば鬼にも涙。ヲ、逃げ廻るを掻首にせんより。踊りの中でずつはりとだまし討ちは我等も勝手と。詞たるめば右馬頭。以前以前の如く胡亂胡亂な眼に。人違へして斬り損はど直ぐに御邊が首が飛ぶ。性根をつげよと鑊打ち叩きし眼ざし。ヲ、齋藤が刀の斬れ味。見て吠えるなと股立からげ突立つたり。サアサア地宮様鶴千代踊りくくと。子を呼ぶ善知鳥知鳥安方の安き間もなき親心。庭に入り来る踊子に立交りても此二人ヲ砂子の中の黄金黄金かや。

### 身替り音頭

ッ母は今宵ぞ。名残りの音頭是やこの。七月の十六日は佛の慈悲。奈落奈落の底の罪

人の呵責たてがみの炎はげ休ませて。充滿じゅうまん御願ごねん如清じゆせい涼池りやうちと語り踊りて遊べども。長長十七日の曙あけぼのは元の奈落ならくに苦しむと孟蘭盆ぼんぼん經きやうに説かれたり。我子は罪人ならねども。踊は宵の夢の内此曙は死出の山。さぞ父戀し母戀し。戀しくと鳴くは冥途の鳥かエ。音頭冥途の旅に行く鳥と。婆ば婆ばに殘れる親鳥の。涙に絞る袖の露。消えし昔の物語。踊子衆も父上も。聞いて諦らめッ給へとて。ヲ、語るも同じ涙ぞや。いにしへ多田たのたの満仲まんちゆうの。夢幻まげんの世を觀じ。乙おとの若君わかしみ美女みよめ御前ごまへ。音頭墨の衣いに染めて染めまらぬ御怒り。美女が首打て仲光なかつくと。主命しゅめい遁るゝ、ッ方もなし。無慚むざんなるかな仲光は。斬れとあるもお主なり。斬り奉るもお主なり。兎角我子の幸壽丸しきうまる御身。替りと思ひ込む親の。心を子は知らず。ッ手振り袖振り踊振り。見るに消え消え弱る心を取直し。斬つて替へたる末

世の手本。武士の鑑かたみの露塵ろじん程も。心殘すな我も殘らぬ今が思ひの切り所。思ひのな切り所さ。地地サア切り所をれ斬つていのく。切り所サと我子の廻りに泣く泣くも。斬れサ。斬れサと教へても。胸むね口くちして宮をくくと心を付くる熊鷹くまたけ眼まなこ。宮を打たば遁さじと腕を固めし一世の鑑かたみ際さかい。何れが打たれ斬られても悲しみは母君一人。共に死しな帳とての現まか夢か。是は因果の踊の輪わ。廻りくくって宮の廻りは音頭が固ひ。我子の廻りに爰で斬れサ。是を斬れサ。教へても又やり過し。猶も輪回りんかいの幾廻り。長き思ひをかけんより。只一思ひに爰で斬れサ。地地心得たりとひらりと見えしは刀の電光でんくわう。踊の廻りか手の廻りか。二人は外れて次ぎの子の。此奴のく奴やつの奴やつづゝみの幼な首。水もたまらずつばと落ち。太刀押拭おしぬぐひ立上れば。そりや斬つたわ斬つたくと。ッ踊は破れ皆

ちりく。花園若宮鶴千代引退け。見れば命に恙なし。三人ハア、くはつとばかり眩み切つたる心の間に。火を場けたるが如くにて、エチ初めて。氣息を繼ぎにける。右馬頭心を活めこれ齋藤。宮を助け奉りし志は神妙ながら。數ならぬ町人の子を斬らんより。なぜ鶴千代が首打つて。宣明が志を立てさせぬは。但し所存ばしあつての事かと咎むれば。數ならぬ町人の子とは恨めしい。此首は土岐右近の藏人。頼貞といふ弓取の忘れ形見。娘早咲が體內に宿りし我孫の力若丸。數ならぬ町人の子と踊振りにも見るならばさぞ若宮とは雪と曇。何の詮なき身替りと首投げ出し。親子共にむざくんと無駄死させし可愛やと。一生我強き齋藤が初めて涙の萎れ顔。黒鐵の丸かせの踏躰に湯となる如くなり。人々手打ち扱は孫かと帽子ほどけば。髮結うたる

太子變。額氣高き引白粉眠れる花の死。左程天皇に忠心とは存ぜず。情知らずの齋藤物知らず人でなしの太郎左衛門と。子によつて親々の名を擧ぐる梅檀の過言は御免下され。お詫び申すと手を



二葉とは此事。宮の御爲鶴千代が爲にもつけば。ヤア天皇へ忠心とは粉らはしい言分。元より六波羅方の某。舍利が甲

になるとても二心ある太郎左衛門でな  
 し。皆これ掣の頼員が忠節なまじひ官軍  
 に興せしその甲斐なく。雑兵の首一つ  
 も取らず無駄死したる不便さ。此子を守  
 り立て天皇の御用に立て。父めが修羅の  
 憤憤を。散じてくれんと思ふ折柄。若  
 宮の首切箱のお使。すは掣が名の揚げ  
 所。人手には渡さじと思ひ。嚴めしき先  
 陣を望む如く。大人氣なくも内室花園  
 と。面を赤め争ひし故にこそ。一天四  
 海の主となる宮を助けし掣が高名出来い  
 たな。今生にては漢の紀信が忠義に超  
 え。未來閻魔の廳にては。黄金の札の  
 一筆とや。ヤイ人死しての魂魄も。  
 知死期迄は身體を去らずよく聞け力  
 若。侍たる身の果報の死とは蒲團の上の  
 病死にあらず。戰場に向つてよき敵に  
 出合ひ。につこと笑ひ尋常に討死は。文  
 武に富める果報の武士。コリヤおのれ

を打ちしはな。六波羅の侍大將齋藤太郎  
 左衛門利行。敵に取つて不足なく。踊  
 の庭は軍の場音頭は鮎波の聲。晴業の討  
 死果報者武士のあやかり者。現在望み達  
 すれば未來は九品蓮台。今の音頭を引導  
 にて魂冥途の鳥となり。父よ母よと呼  
 おついで。祖父をも呼んでくれよとて。  
 堪へに堪へし齋藤が泣きかゝつては留め  
 どなく。天に仰ぎ。地に轉び涙。千條  
 の繩纏亂れ。叫びて歎  
 きしが。ヤ忘れたり  
 是よりは檢使の役。  
 お暇申すと首を捧げて  
 立上れば。御母局泣く  
 泣くも。位ある生捕  
 は引渡すさへ輿車。後  
 醍醐の天皇第九の宮の  
 御首。あからさまには  
 畏れあり。此御柏を

八葉の御車と渡し給へば御首を。包むに  
 餘る赤なま涙に老の足弱車。暫らくなう  
 と右馬頭差添抜いて我子の鬘。秋の薄と  
 切り拂ひ直置して我鬘。ふつと切つたる  
 輪回の絆。死すべき性は助かりし。力若  
 が爲の子道心。我は武士を捨て坊主。侍  
 ならねば忠も入らず義も入らず。二心と  
 人も笑ふまじ兩御所の御供し。御出世迄  
 の諸國修行巡ぐる月日は返れども。歸ら



ぬ死出の御幸みゆきの車。魂たまごは天子の御所車。  
魄たまごは乳人が肩車。父には別れ母には別  
れ。一人の祖父も捨てゝ行く。亡き精靈しやうりやう  
も来る盆に何とて婆おばあ婆おばあは秋の風。恨み喜  
び悲しみ妬み。情なさけよ仇あだよ敵味方。人間有  
爲みの喜怒哀樂きどあいはりは無常の。庭のひと踊り教  
へて歸る子は佛と悟りて。別れ別れけり

#### 第四 大塔の宮熊野篠懸

諸共。に哀れと思へ。山櫻。花に心を  
蘇民書札の。姿に變へて大塔の。宮も草  
鞋わらじの旅衣たびえ。ヌエテ今ぞ初めてみ熊野の。先  
に落着く當もなく。忍び落ちさせ。フシ給  
ひける。天照神の御末にて。龍樓風闕の  
内に人と成り。華軒香車の外とは。い  
つしか君が稀れにだに踏みも馴れさせ給  
はねど。螺鈿らでんの笈あしを肩にかけ。フシヤリ先  
にへ歩みの弱氣じやくきなく。フシ心も。堅き金剛  
杖。附添ふ赤松律師則祐。ヌエテ平賀の

三郎國綱。村上彦四郎  
義光ならで。外に御  
身に。添ふ者は。人に  
うそふく法螺の貝。兜  
巾錫杖きんせきじやう篠懸の。いか  
にふり行く世なるらん  
長汀。曲浦の旅の道心  
を碎かせ給ひける。御  
有様ぞ痛はしき。ヌエテ  
由良の港を見渡せば。  
おのが様々入る舟や又  
出づる。舟の舵かじを絶え  
浦の濱なみゆふ幾重とも  
小舟こぶね知らぬ。波路に  
漕ぎ別れ跡なき。風に  
鳴く鷗うの。沖の浮洲の浮  
きながら底の。心の深  
緑。松に懸からで藤  
代の。峠たけは空に這ひま



とひ。フシ雲も散り居ぬ天の原こや天の原こや天の上の。塵泥を爰に捨てて、の高峰かやいや。吹上の浦風に。積りくして。君が代の今も道ある和歌の浦。千代の齡は知らねども。雲井を懸ひて。鳴く事は蘆邊の田鶴も我が身も。セツリ一つ流れの水。上はフシ幾谷川の。落ち合ひて。渡るも難き岩田川。昨日は詩作り歌に詠み。長雄じきにかくとは思ひきや今日見る賤が營みの。辛くも汐の。身にぞ秘む。切目の王子に着き給ひ。ユエナ各法施を奉り。丹精無二の御祈りオホキ誦經の。聲に打粉れ。胸に木札の取普陀落や。岸打つ波は三熊野の。フシ那智のお山を。順禮の歌唄ひ連れ下りしが。フシ御前に畏まり。いまだ知らし召されずや。當山の別當六波羅の武命を含み。地色君を待ち受け奉れば大義の計略なり難し。十津川の方へ渡らせ給ひ。時の至るを待ち給へ御道指南は我々

ぞ。いざこなたへといふしでの。フシ神がく。れして失せにける。シテ地色宮御喜び斜めならず。これ權現の苦ぐる所我が武運神慮に叶へり。勇めや勇め方々と。ニラフシ又十津川と尋ね入る其道嶮。峙ちて。去年の寒さの降積る。峰には残んの。フシ雪解けて。地千尋の谷水藍を流し見おろせば目眩めき。又萬仞の高嶺は。本フシ星も手に取るばかりにて。見上くるに氣も消えつべし山路に五穀無うして。木の實に朝夕の飢を凌ぎ。東西分かず夜晝は木の葉まばらの柙より。洩れ來る影を力にて御腰を押し御手を引き。切れし草鞋の替へもなく御足も缺け損じ。流るゝ御血の肝に泌み。フシ御草臥を勞はれば。地いやとよ山伏は山に伏す。草には伏さじと御戯れ。フシ笑ひに道も抄取りて。猪が潮湯浅。蕪坂小原芋が潮打過ぎて。熊野高野の中津川。孤村の辻に佇みて疲れを。晴

らさせ。三皿へ給ひける。フシ霞につれて。地櫻散る春の山路を行人の難所。菱桓高桓兵具ひつしと立並べ。風も通さぬ關所の圍ひ。平賀の三郎國綱の御前に畏まり。地樵夫が申せし詞に違はず。是こそ芋が潮の庄司忠宗が。君をとどむる新關打破つて通らんは大事の前の小事。地色頼んで御通りあるべうもやと關所の前に突立ち。地後醍醐の天皇第三の宮征夷大將軍護良親王。逆臣に襲はれ此道を御通りなるぞ。庄司を頼み思召さるゝ木戸を開き逆茂木を拂ひ。路次の警固仕れと高らかに呼ばはつたり。地色關所俄かに騒ぎ立ち待設けたる大塔の宮。生捕つて功名せよと警固の軍兵鎗長刀。フシ矢先を揃へてひしめきける。地色大將芋が潮木戸開かせ躍り出で。地六波羅の御説もだし難く新關を据ゑ待設けて候へども。王土に住みながら宮に敵對もなる



まじ。又左右なく通さんも六波羅の聞え。御供の内一兩人繩をかけて引かるゝか但しは錦の御旗を渡さるゝか。地色二つに一つなるまじくば力なし。一矢参らせんと、フシ片手矢翹けて罵つたり。地色城へぞいなき律師則祐眼をくわつと怒らし。

■ヤア芋喰らひの尻つびり親爺め。熊野山家のとろくに住んで京家の武士の心は知るまい。コリヤ此首はころりと落ちても繩かけらるゝ白痴はない。まして錦の御旗をおのれ等づれに渡さうか。地色望み吐く願た骨躰裂いてくれんと駈出づる。

■平賀縫つて待て〜則祐。危きを見て命を捨つるは臣下の習ひ。鬼でも角でも宮を通し参らすこそ大望成就の基とは思はぬか。地色芋が潮の庄司が望みに任せ某彼が手に渡らん。繩かけよ則祐と後手になつて駈塞がる。いや〜存じも寄らぬ事。我に任せと駈出で〜止めてもとま

らず動かさせず。フシ止まれ放せと競合うたり。地色宮兩人を制し給ひ。則祐が勇は北宮騎が勢ひを凌ぎ。地色平賀が忠は孟施舍が義を守る。ヲ頼もし〜さりながら。地色義兵を思ひ立ちしより命を戦場の的に立て。心を險阻の南山に碎き今迄附添ふ

方々は。厭が手足も同じ事旗を渡して庄司を宥めん。逸つて事を仕損するなど宣へば。赤松平賀詞を揃へこは言ひ甲斐なき御説や候。朝敵追伐の御門出旗を渡すは不吉の相。是非御無用ととゞむれば。地色いやとよ戦場に物具を捨て敵に取らるゝ事。恥に似て恥ならず織へ恥辱になるとても。地色汝が命にフシ替ゆべきか。地色生きるとも死ぬるとも必ず一所とばかりにて。エネテ御目に餘るはら〜

涙。地色は勿體なき御詞と二人は平伏し其加涙。芋が潮の庄司返答いかゞ遅し〜と責めかけたなり。宮御笈を押開き。金銀に

て日光月光を打つたる錦の御旗取出し旗竿にかけさせ給ひ。汝必ず天恩を戴きフシ榮花を期せよと賜ひければ。地色庄司御旗押戴き此上は仔細なし。それ〜と木戸開かせやう色代へしてこそ通しけれ。地色庄司軍兵を近く招き。■サア手下さす上々の仕合せ。六波羅の御前は宮に出合ひ。手痛き戦ひ御旗を切り取つたりと。僞りは出放題。何と御褒美は金であらうか。但し米か。若し國郡を賜らば

福徳の三年目一刻も早く上京せん。馬よ鞍よと用意の最中。地色村上彦四郎義光宮に後れて駈付けしが御旗を見てびつくり。これ〜方々其旗は。斯様〜と庄司が答へ。地色聞かや聞かず飛びか〜

り。大地にどうど踏み付け。■忝くも天子の御子朝敵追伐の御門出に参り合はせ。大凡下の奴輩が御旗を手をかけし。地色天間思ひ知れと胸骨ぎやつと踏みに

じれば、旦那を救へと軍兵ども、フシ一つになつて斬りかゝる。雄なうしほらしや汝等も主の先途見届くるが。サア来い來いと當るを幸ひ。取つては引寄せ人礫はらりくくと三重へ投打つは。雄も重が礫の印地打。庄司を初め逃散つてあたり近くに影もなし。逃ぐるに途方失ひく御旗大事と引擔げ。逃げ踴む芋が潮が下人。ヤアいづく迄御旗返せと追掛け。ぽつかけ御旗挽取り。大の男を取つて投げ足下に踏まへ睨めつくる。續いてかゝる雑兵の鎧の綿纏掴んでぐつと上げたる其有様は。末世に神社の繪馬にも。名高き山峰谷を越え宮の。御跡 三重 任音雄 氣違ひよく。氣違ひよ泡齋よ。氣違ひよくと。名乗る人こそ氣違ひなれ。文重 姿。老木。の。色もなき。吉野初潮の。師走の空。高雄の山の春の暮。散りて。亂れん。花もなく。風もいとほぬ。セツニ秋。

の葉の。ナホス何故狂ひ。フシをめけるぞ。かざしの藤の花菱。是や亂れて狂ふらん。嫁の蓬生娘の呉服驚き跡を慕ひ出で。情なや又爰に現なき御有様。熊野十八郷の其中にも。芋が潮十津川燕在三郡の主にて。仁義者と人も怖ぢるお身。色何故かゝる亂心。スエテ悲しさと泣き口説けば。田なう和御前等は何を歎くぞ。何戸野の兵衛が氣の違ひしが悲しいとや。ヲよう泣くく。取泣けく來なけ。梅の鷲時鳥。親に似ぬ子は鬼梅蛇。梅角の生えた小梅取つて嚙まう。ナホス構うてくれなと。押退け突退け。ヤ。ヤ。雄そなたはどこへ。躑躅の山へ花折賣りにか。花折賣りに。花折賣りに。花賣りくく花折賣りに。ナホス走りく走りつき急げ。我も行かんと駈出づる。人々周章て縋り止め。氣を取直してたべなうと焦れ。款けど。其甲斐も。七十

年近き老の波立居も荒く面色變じ。ハ、ハ、可笑しの人の言ひごとや。汝知らずや我は是。熊野三所の大権現年を重ねて二葉より。三つのお山に咲き添ゆる。我神木の藤の花美麗を好む心より。爰に植ゑたる驕慢の非禮をくゝる花菱。スチス様に亂れ狂はするも。我がなす業とは白藤の。フシ思ひ知らずや思ひ知れ。驕は却つて身を賣むる。我が念願の枝葉榮えて熊野の山の。上に望みの藤は見えたり嬉しやと。行き。登れば憂は身を掴み。花房は骨をとほす。こは何とせん恐しや。藤の。若芽の。尺になる迄今此報いは遁れ難なや。由なかりける我が驕やと。フシ震ひ。わななき白髪も亂れ逆装の。大地に逆立ち虚空を攫めば。とどむる甲斐なき女の力。祓ふは神力神罰の。狂ひ亂れてかつはと轉び。神の怠り給ふと見え。正體もなき其有様。雄詮方涙にく

れながら。抱き起して嫁娘。寢所に  
へ引立て入りける。其折節に婢の女。  
なう蓬生様服様。お山伏達はや、はへ  
と。案内に従ひ大塔の宮。村上赤松平賀  
の三郎引連れ病家に入らせ給ひ。我々  
は熊野山に千日籠り。一萬座の護摩を修  
し三十三所順禮の山伏。頃日麓の辻堂に  
疲れを晴らす所。病人あり加持せよとの  
御頼み。生靈か死靈か佛神の祟りか。或  
ひは非業の病氣なりとも。祈念して参ら  
せんとありければ。有難い病人と  
申すは自らが舅。去年の暮より俄かに奇  
麗好が病の起り。見え渡りたる座敷々々  
も立て直させ。御覽遊ばせ此藤の棚許  
は権現のお山にありしを移し植ふ。花の  
盛りを待つも程なく蕾の芽含む頃より心  
亂れ。藤を元の山に返せと漫言。権現の  
御祟りか藥療治も驗なく。自らが夫は  
上京の留守と言ひ。何を斯うとの力もな

く各々様の御事。耳に入りしは天の告げ  
と押し迎ひを参らせし。御祈念頼み奉  
る病人是にと押開く。障子の内に狂ひ臥  
す。老の姿の便りなし。安い事  
身に相應。祈り治して参らせん平賀坊。  
用意あれと宣へば。宮の御笈枕に立  
て。獨鈷三鈷鈴錫杖。五十串にツン神や  
塵くらん。加持に参らんと。  
もとより豪嶺の法水を湛へ。智行兼備の  
大塔の宮。珠數押揉んで千早振る。コハリ  
神は本有の都を出で分段同居の塵に交は  
り。斷惡修善は濟度の始め。哀愍擁護は  
利物の終り。就中熊野三所の権現は。日  
本第一大験の。靈神。伊弉册尊の神  
窟。新宮本宮は事解男速玉男。牟婁の都  
に宮居して。直なる道を守りの威徳。四  
海波靜かに。八天塵治まつて大悲。  
擁護の眷露は利生を三つの。山にたなび  
き。萬歳が峯の。松風も。花の盛りは柳

の葉の一葉。守りの。フン神心。コハリ仰ぎ  
願はくは從類悲歎の誠心を憐み。抜苦與  
樂の眉を垂れ。速かに立去り給へ。抜苦與  
樂消滅不老不死と。せめかけ。責めかけ。  
祈り祈られ戸野の兵衛むつくと起き。震  
ひわなき立つつ居つ神風の。一もみ採  
んで面には白汗を流し。袂に露のしげ玉  
の時ならぬ霰玉散る。足踏はどうくど  
う。狂ひ出づれば客僧達。皆同音に聲を  
上げ。ハリオン摩訶般若波羅密多。十六善  
神哀愍擁護。滅惡生善經々部。明王部  
天童子部。七曜九曜十二宮。二十八宿三十  
番神。修行者猶如薄伽梵と。祈り伏せ  
て。臥したる夢の覺むるが如くツン忽ち。  
本氣人心地。なう有難やと嫁娘。拜み  
つ父に取付きつ悦び。合ふこそ道理な  
れ。戸野の兵衛頭をさげ。お山伏達の効  
験にて。治すまじき我が狂氣本復。何を

以つて恩を報ぜん。五三が月も御逗留。

誰かある御笈直せ嫁御娘よ御馳走申せ。過分至極と無二の喜び。宮御力を得させ給ひ。あつと言はんとし給ひしが。

附添ふ人の心を兼ね。行く先の道遙かなり只御暇と立ち給へば。呉服差出で押しとどめ。父も御留め申さるゝこそ幸ひなれ。所は山家の事寂びて御慰みはなけれども。旅の疲れの晴るゝ迄御不承ながらとばかりにて。じつと見る目は戀知りの生れついたるおもて道具。田舎細工の手に。京恥かしき風情なり。兵衛座を立ち出来いた娘よう留めた。客僧達。サアこなたへと手を取れば。村上義光いや〜。先達は貴殿に預け何時迄も御逗留。我々は初参の修行。一日も安閑と暮らす事能りならず。靈佛靈社心のまゝ参詣致すが結句御馳走。平賀坊は河内の國金剛山に立越え。多門院楠

坊に對談あれ。我は吉野に参詣し庵室になるべき地形を見立て。同行の山伏かり集めん。赤松坊は何と〜。されば愚僧は播磨の國。苔蘚の山一見。先達より許しの袈裟狀圓坊に相渡し。都にて出逢ふ手筈を取りて立歸らん。尤も尤もいざ打立てと六波羅追伐諸軍の相圖。山伏詞に喋し合はせはや御暇と立出づれば。不思議の縁に大塔の。宮も兵衛に誘はなれ。打連れ。奥にッ入り給ふ。既に傾く日脚早く。若旦那お歸りと騒ぐ聲々。妻の蓬生走り出でほうお歸りか大彌太殿。先づ御達者でと半分言はせず。父兵衛殿狂氣なされしと道すがらの噂。夜を日に繼いで歸りしが女房誠か。さればいの難瀬の案じ事。さりながら都方の山伏とて。此頃此地へ参りしを頼み。其祈禱にてすつきりと御本復。氣遣ひあるなと云ひければ。ヤア都山

伏。して其山伏同行何人。形恰好はどうぢや聞きたい。されば先達は十六七か。八でもあらうか。色白に位のある風俗。跡は三人何れも賤しからざる器量。三人は方々の神参り。先達一人あの座敷に御逗留。何ぢや三人は爰に居ぬか。こりや旨い。サア親爺殿に逢はう。急に御話し申し度いと。爰へちよとお供せい早う。ほんに疾から知らずる筈。待つてござんせお供して來うぞやと。いそ〜ッ走り行く跡に。大彌太獨り笑みを含み。取つて投げて細かけうか。いやいや弱めだて危ない。細首ころりと。ややつたりと善ぶ後に父の壁。やれ〜大彌太歸りしかと嫁に縋りて立出る。聞きしよりお顔も實れず。早速御本復。此上の珍重なし。扱密々にお咄し申す事ありと。摺り寄りしが是女房。用あらば呼ばう勝手へお立ちやれ。ハテ女房に何

290

の御遠慮。あればこそ立てと云へ。●色立  
つてうせぬか女めと。俄にむき出す眼  
球。あいと廊下へ駆出でしが隠すは仔細  
ぞあるらんと。障子にひつ添ひ立聞くと  
も。知らず大彌太聲をひそめ。●此度の  
上京六波羅殿に御目見え。首尾残る方な  
く其上の御説。大塔の宮熊野路へ落失せ  
在所知れず。召捕つて出さば御恩賞に。  
泉州一國を賜はり大名になされんとの御  
事。家繁昌の基と存じ畏つて罷り歸る。  
四人連れの山伏が父の御病氣祈り治せし  
とや。其山伏お尋ねの大塔の宮。招かず  
して手に入るは天の授くる我々が果報。  
今宵の内に打取り。明日首を都へ登さば  
六波羅の御感。拙者は大名。●喜んでた  
べ親父様と首へども何の返答なし。申し  
申し大名の親になる事。お氣に入らぬか  
親父様と問へどもうんともすんとも云は  
ず。いやさ兎角の返答なされ。親父様親

父殿とせりかけける程猶うつとり。きよろ  
きよろ目なる顔振上げ。ハ、、、ハ、、、  
へ、、、。●おれが死んだら。新田煙草で  
焼いてたも。煙管卒堵婆に。立てゝたも  
とは何のこつちや。何のこつちやえ。  
大彌太興さめこりやどうぢや。又氣違ひ  
がおこつたかと抱きすくむれば振放し。  
●わりや誰ぢや。ムウ竹生嶋の辨才  
天か。●べんづるく辨才天。南無地藏  
かの。ワハ、、、。宮様殺そ。宮様殺そ  
と駈出れば。取つて引伏せ首捻挽め。  
それを齒筋へ出す事か。だまらぬか親  
父。●願背立てると一刀こりや。●こりや  
こりやと閃かす。●女房驚き障子押明け  
飛んで出で。●エ、勿體ない。時の拍子  
怪我にも刃が觸つたら何とせうと思つて  
ぞ。●危ないくともぎ取るに放さばこ  
そ。●おのれ女め立聞きしたな。サ立聞  
いた心ぬかせ。大塔の宮に知らする氣

か。但しは共に殺す心か。●返答次第一  
討ちと。振上ぐる刀も恐れず。其廻り氣  
は誰が付けた。立聞きするも男夫の大切  
さ。そもや他人の●最辱して。三年馴染の  
男の大事。打明けさうな女ぢやと。思  
てかひの情なや。疑ひ晴らして下されと  
縋り。付いてぞ泣き詫ぶる。ムウ聞分け  
た頼もしく。氣違ひ親父にかまけ。大  
事を氣取られ討洩らしては一生の残念。  
芋が瀬の庄司も某に一味。立越えとつく  
と談合極はめ今宵の内に討つて取らん。  
其親父座敷へ追込み。徒口きかすな動か  
すな連れて行けく。●なうく世話や  
大名にも大體ではならぬ。是を思へば  
山の芋が●鱈にはようなるぞと。●咳  
き。咳き出で行く。●其日もやがて。くれ  
は姫。●戀慕の暗き宵闇は。更けぬも更け  
し心にて。●其胸もとときつく鐘の聲今こん  
こんと行先の。人は待たねど我獨り。焦

るゝ手燭拂へて。竊かに闇を浮れ出で。せめて一夜は大塔の。宮とは知らず。御寝所に。忍ぶも間の長廊下恥かし見たし逢ひたしの。心ばかりが。歩み行く。跡に隠れて蓬生が人に知られじ見られじと。包むも響く板敷の音。あはや人こそ。呉服は手燭ふつと吹き消す烏羽玉の。闇はあやなし探り足。跡には先に人ありとも思はず。嫂小姑。はたと行逢ひア悲しと飛び退き。震ひ居たりしが。蓬生こはく透し見て。何どなたぢや。誰ぢや物云はぬか。なう其聲は蓬生様か。さう云ふ聲は呉服様か。アイ。エあの子はいの。あつたら肝を冷した。大膽な一人こりやどこへ。問ひかけられて行詰りいやついそこへ。いやついそことはどこの事。若い娘のあるまじない。いやく氣遣うて下さんすな。ちとの間そこへついで物しに。サア物しにの其譚聞か

う。幾どうぢやくと根を押され。人を咎むる蓬生様はどこへのお出で。若い嫁のあるまじない。幾色そちら先へ言はしやんせと。竹筒返し鸚鵡返し。ハテ隠す事はない。先達のお山伏と寝に行くはいの。兄様と云ふ男持ちながら。ア蓬生様嘘ばかり。誓文くされ嘘でない。沙汰なしに頼むぞや。いやくそんなら置かしやんせ。何を隠さう先達には自らが首だけ。ヤアそなたも惚れてか。それなら物を順道にしませう。嫂がひに今夜は蓬生。明日の夜は呉服様。今宵一夜は辛抱して。去んで寝て下されと言捨て。駈出づる。是々まあ先づ待たしやんせ。先に来たは自ら。こな様は事かぬお身。私を先づやつと駈出す。どつこいやらぬ。これ小賢しい呉服殿男狂ひまだ早い。蓬生が戀の邪魔しやるか。

駈行けば引戻し。互の差合ひ喧紛れ。あなたが進めばこなたが止めこなたが行けばあなたが止め。競合ひ廻つて御寝所の。障子にぐわつたり行當れば外れる障子のあをち風。燈火消えて闇こそよけれ臥所はいづく。是爰にと。夜着に二人が抱き付き。裾からすつぱり父の兵衛。抜出る蟬の殻衣。蓬生が襟掻い掴み取つて引据ゑ。宮様く。畏れながら燈火はへと呼ばはる聲。手燭か上げて出で給へば。二人の女はつとばかり。赤面。詞はなかりけり。兵衛怒りの眉を撃め。エ、憎つくい女め。今宵宮を害せんと云ふ。夫に一味の身を以つて何ぢや。宮様につゝ惚れた。戀慕に事寄せ忍び入り。宮様を殺さうや。大彌太めが言付けか但し汝が貞節だてか。兵衛が忍喰ふかと。小刀も忠には太

怒りの涙にくれければ。呉服見兼ねて引分け押退け。何のさうではあるまいに。堪へて進げて下さんせと後に。圍ひ身を隔つ。蓬生涙の顔振上げ。『いや／＼』詫びする術がない。呉服殿頼まぬ。これ親父様。夫に一味と。我を疑ふ勇殿が猶疑はしい。一つ／＼言ひ立てうか。ヲ聞く迄ないこりや尤も。一人の悴を捨て宮に身命を擲つ兵衛。女の身では疑ふ筈。其疑ひ此方からぼどいて聞かせう。去年都の騒動聞くと等しく。辛が瀬十津川燕坂。三郷の勢を引具し都に上り。天皇の御味方せんと悴大彌太に慥し合はせば。却つて六波羅に加勢せんと。『是れ既に親子の心はだ／＼』。一先づ宥め大彌太は都へ上せ。河内の國金剛山の城主。楠多門兵衛正成に與力し。打つて出んとせし所に天皇軍に打負け給ひ。大塔の宮作り山伏となり。熊野の方へ落ちさせ給ふと。楠

が方より飛札を以つて告げ來る。熊野の別當は無二の武家方。御足たまらず此地へ來り給はんと推量し。『是れ圍まひ御世に立てん計略。奇麗好きを病と欺き。建て直す館の結構。宮を入れ奉らん支度』。今ならでも聞かじ。猶々作り氣違ひとなり。山伏ならば呼び入れて祈らせ。宮を見出さんと碎く心の今月今日。嬉しくも巡り大塔の宮。萬乗の宮の御祈り。縦へ誠の狂氣なりともそもや治らであるべきか。兵衛が氣違ひ心の煩ひ。立ち所に平癒し。日頃の望み／＼足りぬるぞや。折節立歸る無道の悴。斬つて棄てんと思ひしかど。思へば一人の男子。ま一度こぞ直して見んものと。有免は親の因果。宮の御首賜らんと忍び來るを引捕らへ。生死の意見せんと思ひ爰に忍んで悴を待つ。『サア此外に疑ひあるか。兵衛を疑ふ念は晴れて。汝が身の上ひつし

と詰つて言譯あるまい。寢物語の折々に意見せば。『是れ女に靡くは男の心直る品もあるべきに。夫百倍邪見の女。似寄つた者が女夫になる。例に引かれん淺ましやと。』『エエ、恨み啣ちて泣く涙。蓬生が胸にせきかけ／＼』。共に。むせび入りけるが。勿體なや親の慈悲心にて。爰に忍びましますを。夫と一所の合圖。宮を害せん謀計と。疑ひし冥加なや。親御の手に餘る我夫。臆になり貂になり。意見する程ひがみ根性。宮を害せんとの物語。よしにと云はゞ即座に斬られ。『是れ死ぬる命は惜しまねども。長らへて宮を落し奉らば。取逃がしたる其分にて御世になるとも後々迄。宮の御祟りもあるまいと。間に合せの空一味忍び入る廊下にて。』『呉服様に出合ひ。宮様に戀慕と偽りしは差合ひ云うて返さんため。』『是れ事難儀に及びなば我命を夫に與へ。宮を落さ

ん下心。夫と一所でない證據。見て疑ひを晴れてたべと。襟押しくつろげ諸肌脱げば首に掛けたる不動袈裟。ヤア宮の姿に似せ。死ぬる心の用意か。さは知らず雜言申した。嫁御赦しておくりやれ。扱

は我故苦を見する。過分と宮も御感の涙。兵衛は御運の拙なさと。任せざる世を悔み泣き戀と忠義に嫁娘。浮む涙は一時にわつと泣き入る。ばかりにて四つの。フ袂を絞りけり。晴れ行く互の心と共に。夜半の空の雲も散り。月もほのぼの出でにけり。兵衛心付き。鬼角云ふ間に夜更けたり。悴が來ぬ内蓬生吳服。宮の御供はや立退けと云ひければ。黒智慧の走つた兄様。所々に遠見を置き一町も逃げられまい。それも分別して置いた。此藤透々と熊野山より取寄せ。慰み一遍に植ゆべきか。色まさかの時の逃げ道。棚を傳へば館を離れ小原街道。はや

落ち給へと申し上ぐれば。宮御笈を押開き錦の御旗。一聲吹けば山三重を突貫く法螺の貝。御腰に提げ給へば。尤もくこなたへとオッリ御落ち。支度取急ぐ。宮の御首賜らんと宇が瀬の庄司は座敷傳ひ。戸野の大彌太詰りく下部を残り。廣庭より宮の御寢所一度に斬込む手筈の時刻。内を見込めば臥具取重ね寝入りばな。二人頷き呷き合ひ。駈入つて夜着引きむくれば。思ひも寄らぬ父の兵衛。正體もなき高軒。寝顔見てびつくりせしが揃り起し。是々親父性根つきやれ。宮はどこに臥せつて居る。寢所教やと揃れどもたわいなし。狸寝入り起きやく。起きよくと引立つれば欠伸たらんきよろしく目。おれが死んだら。煙管卒塔婆に立てたもとは。何のこつちやくくくくくえ。折も折どう氣違ひすつ込んでゐよ。邪魔になると突放

し。そこか爰かと探す内。三人藤の棚をひ心せく程身は重く。めつきりくめきつく音にきつと見付け。そりやく棚を傳うて逃げる。庄司殿槍よ熊手よ。まつかせく心得ても手元になく。狼狽へ廻れば大彌太せき上げあれく逃げるは。待てくおのれ等引下さんと駈出れば。父の兵衛先へ廻つて駈蹇がり。三ツ阿波の鳴戸に。身はずんぶり沈むとも。君のおむしやる事をば何でもく。わしや背きやしますまい。しますまい何のこつちや。何のこつちやえ。止むるとなく邪魔すれば。ヤア氣違ひ殿足手纏ひ。退つて居やれと引退け突退けおのれ遣らじと身を採めばちよつきと飛んで。我等は都の白河吉田の某梓に梅若丸とて今此吾妻のな。土となる。土となる。鬼窟に何でもく犬わん猫にやん。鼠ちう。狐こん牛もう。猿きやツく。



きやツ／＼／＼／＼／＼。きやつとも言はず取つて投付け。ほたえ過ぎたる親父めと二つ三つ踏付け。汝等逃ぐると逃がさうかと。又駈出づれば直り。ひよつくり飛び出でて。ニより抑我等は。桓武天皇九代の後胤平の知盛。幽羅是迄現はれ出たるなどと云ふちや。そこらをぬめくり廻る。河原撫子いよの石竹。其根は／＼引抜きにくの木。各宮のお首は取りにくにくの木。おのれが其首我等取持ちは見よと斬りかくれば。大彌太つゝと身をかはし。取つて捻ぢ伏せ押し付け。天命知らぬ似せ氣遠ひ。親の身で子の立身を妨ぐる人間の法か。こりやく／＼妹女房。一寸でも逃ぐれば親父をたつた一刀。宮を渡すか何と何とと聲かけられ。逃げもやらす下りもやらす。我を庇ふなやれ落ちよ。宮を渡さば勘當ぞと。忠と娘に身を捨てし。惜

しまぬ道は親の道。落ちぬも子の道孝の道。宮を葉蔭に隠し参らせ。蓬生突立ち聲を上げ。マヤ／＼大彌太。通るゝだけとは思へども。我が命生きんとて情ある兵衛は殺されず。助けよ大彌太。天照大神の御子孫後醍醐の皇子。二品兵部卿護良親王が腹切るやうを見て。汝等が天命に盡き腹切る時の手本にせよと。肌刀ぐつと突立て引廻し眞逆さまにどうと落ち。君と舅に一命を。分けて最期ぞ哀れなる。ヲ、よい分別と親を捨て御首取らんと走り寄り。南無三寶こりや女房。エ口惜しや誂された。怒る後に父の兵衛遣ひ寄つて。弓手の耳の根。すつはと斬るも老の力。事とせす抜合せ父が肩先六寸ばかり斬下げたり。妹上に身をあせり親の助太刀打ちたいな。南無神様佛様と念願高き藤の棚より。しらりと飛んで下り立つたり。ム、親と一所に死

にたいか。仕舞うてくれん親子兄弟此世の縁。斬つゝ斬られつ渡り合ふ。芋が瀬の庄司駈來り。肝心肝もんは大塔の宮。受取つた棚の下からぐつ／＼と。突込む刀を除けつ開い上からも突く宮の利劍。芋が瀬の庄司が頭の鉢。二三寸突裂かれうんと背向に踏反つたる。宮は法螺貝追取つて。兼ねて合圖の印の高音。吹立て斬立て追ひつ巻つゝ。血汐は飛んで白藤赤藤。互の心うら紫の花を散。らして三へ挑みしが。父は老人女の力斬立てられて半死半生。疵負ひながら庄司大彌太。ひるます宮を討取らんと差添へを矢と投げ掛くる。宮は飛鳥の御身軽くひらりと飛下り抜き駈し。二人を相手に御手を碎き。右を拂へ左がかゝり。庄司を防げば大彌太進み。透をあらせず斬りかくれば。金石ならぬ宮の御身。疲れ果てさせ給ふ所へ。村上義光赤松則祐。

緊那羅摩厭羅の荒れたる如く。宙を駆け  
つて歸るや否や。二人を取つて大地にお  
ち付け足下<sup>そくか</sup>に踏まへ。今日我々立出る  
道にて。合圖の法螺貝頻りに聞ゆ。すは  
やと駈付けハテよい所。軍神の血祭御  
旗に供へ申さんと。二人一度に二人が  
首。えいやつと捻ぢ切り捨て。伏したる  
親子を引立つれば。まだ片息の眩む目  
に。宮と村上赤松を見て喜びの笑ひ顔。  
これ疵淺い所もよし。療治加へばやがて  
よし。子ながら朝敵殺すもよし。宮の運  
よし心地よし。氣味よし。日よし時節よ  
し。彼よし是よし萬よし方角もよし要害  
よし。かけ引きもよしみ吉野に。御陣  
を。召さるゝ護良親王。龍の御威光。虎  
の勢ひ千里。萬里に輝けり

## 第五

地日西天に没する事三百七十余ケ日。大

凶變じて一元に歸すといふ。聖者の未來  
記當れるかな。西國の官軍等天皇を奪ひ  
返し。播磨の國造運幸と告げ來れば。大  
塔の宮護良親王急ぎ六波羅を攻め亡し。  
君を迎ひ奉れと五畿内の勢熊野勢。八庄  
司の勢駈せ加はり六波羅の館。十重廿重  
に追取り巻き錦の御旗比叡の嶺風<sup>かざ</sup>に吹き  
反らさせ。互に合はする鯨波<sup>くじりなみ</sup>勝負を  
龍虎と争うたり。時に城中より大山の  
如く鐘うたる武者三人。得物ひつ提げ躍  
り出で音にも聞くらん我々は。六波羅  
殿の御内にさる者ありと知られたる。御  
器所七郎怒借屋軍次毎田太郎といふ者な  
り。宮の御内に村上赤松平賀と云ふ。一  
騎當千の侍ありと聞く。出よ。晴業の  
太刀打ちせんと呼ばはつたり。平賀の三  
郎つゝと出で。先づ武者振りより口上美  
事赤松村上が手迄なく。三人ながら平賀  
が片腕サア来い。と欺むけば。地詞に

も似ず三人一所抜き連れ。打つてかゝ  
る。平賀事もせり立て難ぎ立て。暫  
し支へて戦ひける。なんの苦もなく三人  
ながら。袈裟斬り立割り腰車斬り伏せ斬  
り伏せ大音上げ。事初めよしヤレか。れ  
と。一度にどつと備へを亂し火水に。な  
れと。三へ攻め崩す。運に乗つたる。  
宮の御勢一騎が十騎に渡り合ひ。百術千  
慮の手を碎けば。城中残らず切盡くされ  
有るは甲斐なき借武者ども。降参くと  
呼ばはつて。城中を乗抜け。官軍に馳  
せ加はれば。味方はいよ。勝に乗る範  
貞飛鳥の翼を失ひ。親王も只泣顔に。眞  
涙零さぬばかりなり。齋藤太郎左衛門  
利行。櫛匂ひの鎧爽やかに出立ち一陣に  
進み大音聲。六波羅殿の御勢悉く命を  
落し。残るは親王主君貞貞。斯くいふ利  
行三人ばかり。多年の高恩此一戦に報ぜ  
ん願ひ。心ある人々下り合ひ恥ある打物

して目を覺せよ。●サア来い〜と、  
力士の如く突立つたり。●是こそ望む太  
郎左衛門我討取らんと寄手の勢。一二を  
争ひ打つてかゝる。村上赤松ヤア暫らく  
と陣頭に駈塞がり。●珍らしし太郎左衛  
門。八歳の宮の御身替り孫を殺せし忠義  
の心底。大塔の宮御恩の餘り。所望あら  
ば望みを叶へ味方に招け。大國を興へ其  
恩に報ぜんとの御説。我々迎ひに向うた  
りと慇懃に相述ぶる。利行から〜と笑  
ひ。扱々頼もしう思ひし大塔の宮愛想つ  
きた。天下に人らしい人はないな身不肖  
ながら六波羅殿。無二の忠臣と頼まれ  
し、齋藤太郎左衛門利行官軍に降参する  
程ならば。聖や娘をやみ〜と矜さう  
か。否とも慥とも返答ない立去れ〜。  
但し首に飽いたらばさらへ落して取らせ  
うか。いや〜太郎左衛門派過ぎる。六波  
羅の先途見届けて。朝敵の方人未代貴殿

が悪名は剥けず。唐土の管仲が古主を捨  
て桓公を助けし事。唐日本にも誰か笑ふ  
と。云はせも立てずア、毛唐人の眞似な  
んの事。物數いふな聞く耳ないと。●立  
てぬく忠義に稱御かん詞なく〜ためら  
ふ所へ。駿河守範貞逆仁親王を高手小手  
に縛め。自身繩取り引立て出でア、太郎  
左衛門悪い合點。●そなたの望みならば  
叶へて味方にせんとの。宮様の口上皆聞  
いた。コレ駿河守が命助けて下さらば。  
味方に参らうとなぜ云うてたもらぬ。此  
戦の元は此親王があるからの事。繩かけ  
たは土産にする心ちよつと一口駿河守  
が。命助けて下されと云うてたもの。  
それが今生後生の忠義頼み上げます太郎  
左衛門。●様々ちやと平伏してフ拜ま  
ぬばかりの風情なり。●太郎左衛門牙を  
噛みエ、脂甲斐ないこれ。●繩取り蜘蛛  
はな。小さけれども羽ある蠅を取らんと

する勇氣あり。●蠅に劣つた範貞殿。村  
上赤松が聞く前恥かしろはないか。サア  
物言はずと切腹〜。ヤア腹切れか。く  
どい〜。なう此腹が切られうかと。●  
俯むく所を抜打ちに首打落し。冥途の案  
内者利行待ち給へ我君と。太刀取直し我  
れと我が首えい。〜と揺落し。●立ち  
すくばつて死してけり。●無念〜と逆  
仁親王。自らかゝる縛は。明王諸天の縛  
の繩。神と君との道明らか。朝敵滅亡  
御代萬歳。二度照らす日の本の。續いて  
天下太平記。四海に覆ふ網の日に。洩る  
る民なき君子の徳百萬。歳とぞ祝ひける

右之本頌句音節墨譜等令加筆候  
師若總弟子如縷回吾儕所傳泝先  
師之源幸甚

竹本筑後掾相傳

竹本大和掾宗貫

予以著述之原本校合一過可爲正  
本者也

竹田出雲掾清定

京二條通寺町西へ入丁

山本九兵衛版

大坂堺筋通日本橋北へ三丁目

山本九右衛門版

江戸大傳馬三丁目

鱗形屋孫兵衛版